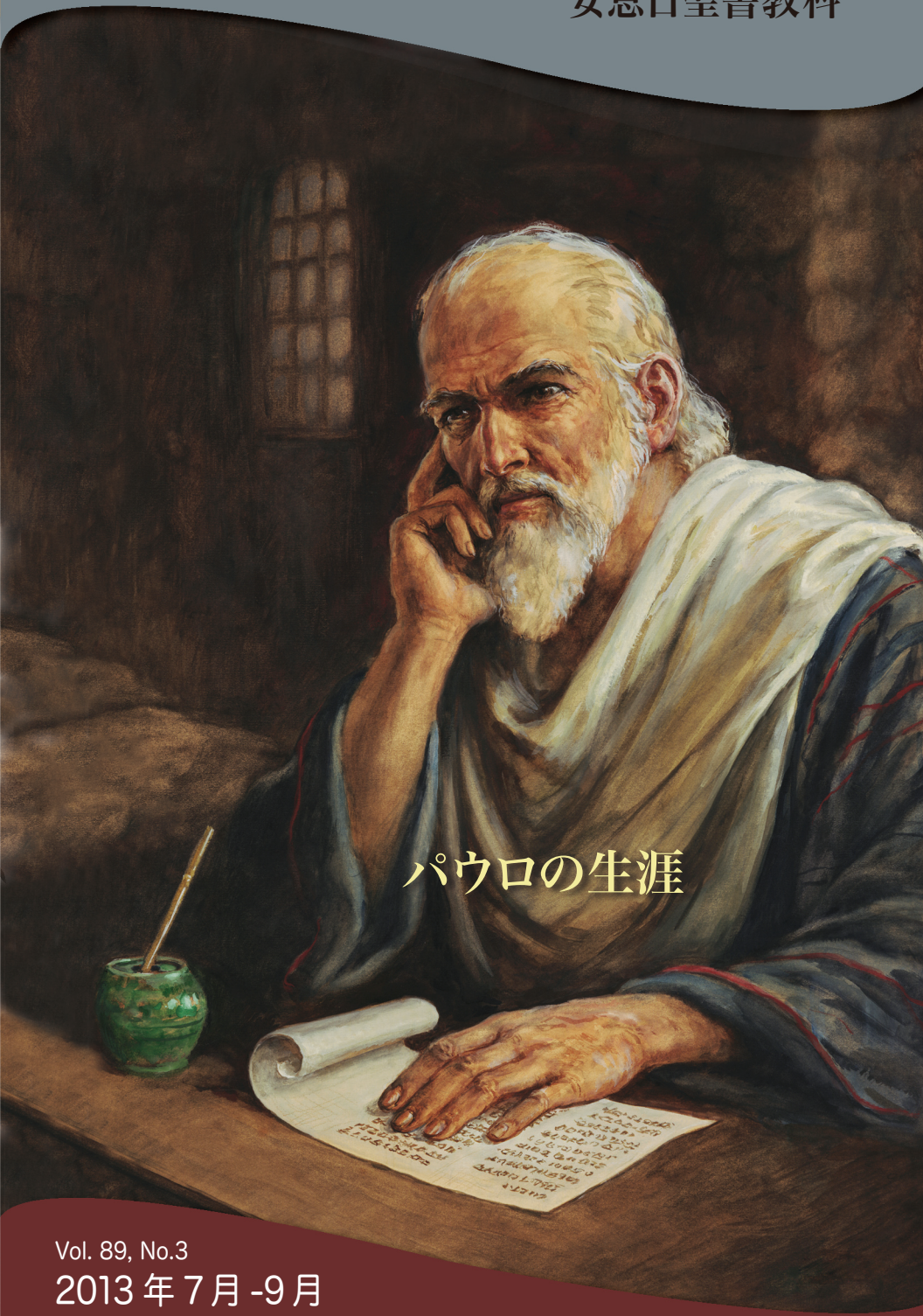
安息日聖書教科



パウロの生涯

Vol. 89, No.3
2013 年 7 月 -9 月

目次

サウロの改心	5
神によって選ばれ、立てられる	10
世俗的な思いの民と働く	15
真理を求めて叫ぶ魂たち	20
テサロニケ、ベレア、そしてアテネ	26
コリント	31
ガラテヤとエペソ	36
危険に囲まれる	41
真理のための囚人	46
カイザルにおける裁判で	52
ローマへの航海	57
ローマ	62
信心深い生涯の終幕	67

セブンスデーアドベンチスト改革運動世界総会安息日学校部(P.O.Box 7240 Roanoke,Virginia 24019-0240,U.S.A)

安息日聖書教科 Vol.89,No.3

編集＆発行：
ＳＤＡ改革運動日本ミッション

〒368－0071
埼玉県秩父郡横瀬町芦ケ久保1607－1

TEL：(0494) 22-0465

FAX：(0494) 26-5059

URL：
http//www.4angels.jp

E-mail:
support@4angels.jp

イラスト：Illustrations: Good Salt on front cover; RF123 on p. 25, and back cover; MapResources on pp. 4, 51, and back cover.

安息日聖書教科は、他のコメントをいっさい加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。引用文は、簡潔で直接的な見解を提供するために、可能なかぎり短くされています。ある部分では、明瞭さや、適切な前後関係、また読みやすさのために〔　〕の括弧が使われています。抜粋されている原文をさらに研究することをぜひともお勧めします。

Printed in Japan

まえがき

今期の安息日聖書教科は、使徒パウロの生涯についてです。（サウロというのは、彼のヘブル語の名前です。彼は改心後パウロと呼ばれるようになり、異邦人のために働くよう遣わされた人です）。いずれの名にしろ、なぜわたしたちはこの神の人の生涯を考えることによって非常に霊感を受けることができるのでしょうか。

「パウロほど熱心で、精力的で、自己犠牲的なキリストの弟子であった者はかつて生存したことがなかった。彼は世の偉大な教師の中の一人であった。彼は海を渡り、世界の大部分が彼の唇からキリストの十字架の物語を教えられるまで遠近を旅した。彼には滅びつつある人類に、救い主の愛を通しての真理の知識をもたらしたいとの燃える思いがあった。彼の魂全体が、伝道の働きに携わっていた。しかし、彼は自ら貧困にあえいでいる諸教会の重荷となることがないように、つつましい労働によって自活した。……

福音における働き人として、パウロは自活する代わりに援助を受ける権利を主張することもできた。しかし、この権利を彼は進んで放棄した。体が弱かったにもかかわらず、彼は日中キリストのみ事業に仕えるために働き、その後、夜の大部分を、そしてしばしば徹夜で、自分自身と他の人の必要に備えるために骨折ったのであった。使徒はクリスチャン伝道のための模範を残し、勤勉を高貴なものとし、尊重した。このように宣べ伝え、労しながら、彼は最高の種類のキリスト教を提示した。」（パウロの生涯からのスケッチ 100, 101）

「自分の手紙の中で、彼は自分自身の試練を長々語ってはいないが、それでもときにキリストのみ事業における彼の働きや苦難をかいま見ることができる。むち打ち、投獄、寒さや飢え渇き、陸や海の難、都市の難、荒野の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、にせ兄弟の難―こうしたことをみな彼は真理のために耐えた。……

絶えざる反対の嵐、敵の怒号、そして友人の離反、勇敢な使徒も時にほとんど意気がくじけるばかりであった。しかし、彼はカルバリーを振り返り、新たな熱烈さをもって、十字架につけられたお方の知識を広めるために押し進んだ。彼はキリストが彼の前に歩まれた血染めの道に歩んでいるにすぎなかった。彼は自分の贖い主の足元に自分の武具を脱ぐべきときまで、戦いをまぬかれようとはしなかった。……

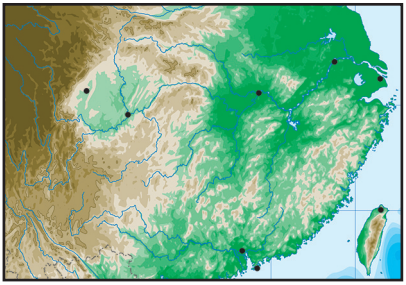
使徒が自分の働きを休んでから、幾世紀がすぎた。しかし、キリストのための彼の労苦と犠牲の歴史は、教会の最も貴重な宝の一つである。その歴史は、聖霊によって記された。それは、各時代においてキリストに従う人々が自分の主人であられるお方のみ事業において、そこからより大きな熱心さと忠実さを奮い立たせられるためである。」（同上 147, 148）これが、わたしたちすべての者の目標となりますように！

世界総会安息日学校支部

安息日 2013 年 7 月 6 日

第一安息日献金

中国の本部のために



キリストにある信仰と祝福された望みにおける親愛なる兄弟姉妹の皆さん、

南中国フィールドのすべての信徒に代わりまして、この真理の伝達手段―安息日聖書教科―を通し、南中国における第三天使のメッセージの働きの前進に関わる皆さんの惜しみない献金をお願いいたします。

「全世界は福音のために開かれつつある。……日本、中国、印度から、アメリカ大陸のまだ暗黒な土地から、世界の各地から、罪に悩み愛の神の知識をもとめる人々の叫びがよせられている。神について、キリストのうちにあらわされた神の愛について、まだきいたことのない人々が幾百幾千万といる。彼らはこの知識を与えられる権利を持っている。彼らはわれわれと同様に救い主の憐れみをうける資格がある。彼らの叫びに答えるのは、この知識を授けられているわれわれの責任であり、またわれわれからこの知識をわけあたえられる子供たちの責任である。」(教育 310, 311)

アドベンチストの信徒の一つのグループが、この教会、すなわちこのお方の戒めを守り、このお方の信仰を持っているセブンスデー・アドベンチスト改革運動の存在を知るようになったのは、2000 年のことでした。同年、彼らは組織されました。いまやフィールドには 173 名の教会員がいます。中国において非常に開かれた地域であるために、セミナーには最も便利な場所です。しかし、わたしたちには自分たちの不動産がないため、諸教会や集会所は、個人宅に集まっています。わたしたちの姉妹のうちの一人が、キャンプミーティング、フィールドの本部またユニオンの本部のための場所として使用されてきた自分の家の一部を提供しています。働きの進展により、自分たちの不動産を持つ必要性が生じています。いま、わたしたちのフィールドは、田舎に一角の土地を購入し、フィールドの本部の建設のためにいくらかの資金を集めました。

すべての安息日学校の生徒のみなさんに、このプロジェクトにおいてわたしたちを助けて下さるよう、お願いいたします。みなさんが惜しみなく神様のみ事業に献金なさるとき、神様がみなさんを豊かに報いてくださいますように。この価値ある計画のためのみなさんの惜しみない献金に、あらかじめお礼申し上げます。

愛を込めて、中国における皆さんの兄弟姉妹より

サウロの改心

「〔サウロ〕は、異邦人たち、王たち、またイスラエルの子らにも、わたしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である。わたしの名のために彼がどんなに苦しまなければならないかを、彼に知らせよう。」（使徒行伝 9:15, 16）

「〔サウロ〕には、聖書の知識があった。そして彼の改心後、神聖な光がイエスに関する預言を照らし、彼は真理を明確に大胆に提示し、聖書のどんな曲解も正すことができるようになった。」（霊的賜物 1 巻 92）

推奨文献： 初代文集 331–338

日曜日　*6 月 30 日*

1.　執事長

a.　主はどのようにステパノを地上の教会における強力な器としてお用いになりましたか（使徒行伝 6:2–8）。

「教会は……み事業に関わる仕事に対応するために、信仰と神の霊の知恵に満ちた 7 人を選んだ。ステパノが第一に選ばれた。彼は生まれも宗教もユダヤ人であったが、ギリシャ語を話し、ギリシャ人の習慣や様式に通じていた。そのために、彼は長として立ち、やもめや孤児、また価値ある貧困者への基金の支払を監督するのに最もふさわしい人物だと思われた。……

選ばれた 7 人はその義務のために、祈りと按手によって厳粛に区別された。このように按手を受けた人々は、それによって信仰を教えることから除外されたのではなかった。逆に、『ステパノは恵みと力とに満ちて、民衆の中で、めざましい奇跡としるしとを行っていた』と記されている（使徒行伝 6:8）。……彼らはまた冷静な分別と識別力の人であり、試練や不満や嫉妬の難しい問題を扱うのによく判断のできる人々であった。」（預言の霊 3 巻 292, 293）

b.　ステパノがユダヤ人の怒りを引き起こしたのは何でしたか（使徒行伝 6:9–14）。

2. 忘れられない死

a. ステパノがイエスを信じる自分の信仰を証し、イスラエルの反逆の歴史を物語るために召されたとき、彼の態度とユダヤ人議会の態度の著しい相違を述べなさい（使徒行伝 6:15; 7:54–60）。

b. そこにいてそれらすべてのことを見ていた人として、だれの名が挙げられますか。また後に彼は、どのように自分がその犯罪に加わったかを述べていますか（使徒行伝 7:58; 22:20）。

「ステパノの殉教を目撃した人たちはみな深い感動をおぼえた。彼の顔に押された神の印の記憶と、聞いた人々の心を動かした彼の言葉は、目撃者の心にいつまでも残って、彼が宣べ伝えていた真理のあかしとなった。彼の死は教会にとって苦しい試練であったが、サウロが導かれたのはこのおかげであった。サウロは殉教者ステパノの信仰と忠誠、その顔にやどった栄光をどうしても記憶から消すことができなかった。」（患難から栄光へ上巻 104）

c. 同国人の昔ながらの精神を持ったまま、ステパノの死後、彼は自分の精力をどこへ傾けましたか（使徒行伝 8:1–3）。

「タルソのサウロはローマの一市民として異邦の都市に生まれ、血統によるばかりでなく長年の訓練と愛国的な献身と宗教的な信念とにおいてユダヤ人であり、エルサレムにおいて最もすぐれた学者の門下で教育をうけ、父祖伝来の律法と慣習について教えられていた。彼は、ユダヤ国民としての誇りと偏見を最大限に持っていた。……

ユダヤの神学校では、神のみ言葉よりも、人間的な思索が重んじられ、学者たちの解釈や慣習によって、神のみ言葉から力が奪われていた。自大主義、権勢欲、猜疑的な排他心、頑迷でおうへいな自負心―こうしたものが当時の教師たちを支配していた主義と動機であった。

ラビたちは、他国民に対してばかりでなく、自国の民衆の前に、自分たちの優越性を誇っていた。彼らは、ローマの圧制者たちに激しい憎悪を持ち、武力に訴えて、国家の主権を回復する決意をいだいていた。彼らは、自分たちの野心的な陰謀とはおよそ正反対な平和の使命を叫ぶイエスの弟子たちを憎みそして殺した。サウロは中でも最も残忍で冷酷な迫害者のひとりであった。」（教育 62, 63）

3. 刺される良心

a. サウロの教会の迫害に対する信徒たちの反応とサウロのとった猛烈な手段について述べなさい（使徒行伝 8:3, 4; 9:1, 2）。心の底では、いつも彼の目標は、しかも若いときから、何でしたか（使徒行伝 23:1; ヘブル 13:18）。

「〔サウロは〕古来の伝統的な宗教の熱心な擁護者として、前途を期待されていた。」（同上 62）

b. わたしたちが誠実に神に従いたいと切望するとき、わたしたちが悪いことをすると、ついには落ちついていられなくなる理由として、イエスは何を明らかになさいますか（ヨハネ 16:7, 8）。

「わたしたちのキリストへの愛は、わたしたちの罪の自覚の深さに比例し、また罪の知識は律法によるのである。」（信仰と行い 96）

「あなたに良心があり、良心はあなたに罪の自覚をもたらすかもしれないが、問題は、その罪の自覚は働いているかということである。その罪の自覚はあなたの心と内なる人の行いに届いているであろうか。汚れからの魂の宮の清めがあるであろうか。わたしたちに欠けているのはこれである。」（思い、品性、そして個性 1 巻 324）

c. どのような驚くべき現象が突然サウロの道を止めましたか（使徒行伝 9:3, 4）。語ったのはだれでしたか。また、サウロの「とげを蹴る」ことに関して、すべての人は何を悟るべきですか（使徒行伝 9:5）。

参考：「そこで彼は『主よ、あなたは、どなたですか』と尋ねた。すると答があった、『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。あなたにとってとげを蹴ることはたえがたいことである。』（使徒行伝 9:5 英語訳）

「〔サウロ〕は敵に対するステパノの忍耐強さとゆるしを目撃した。サウロはまた、自分が責め苦しめた多くのものが示した不屈の精神と、よろこんで耐え忍ぶ姿を見た。彼はあるものたちが信仰のために、いのちさえよろこんで捨てるのを見たのである。

これらすべてのことが声を大にしてサウロの心を動かし、時には、イエスこそ約束のメシヤだという、抗しがたい確信が彼の心を突き通した。そのようなとき彼は幾夜もこの確信に抵抗してもがき、いつでも、イエスはメシヤではなく、彼の信者たちも惑わされた狂信者だという自己の信念を公言することによって内心の葛藤をしずめていた。」（患難から栄光へ上巻 121, 122）

「福音の前進を阻もうとする努力はみな、反対者にとって傷と苦しみの結果に終わる。遅かれ早かれ、彼自身の心が自分を責め、彼は自分がまさにとげを蹴っていたことを見出すのである。」（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1911 年 3 月 16 日）

4. 転機

a. サウロが突然低くされた方法を述べなさい（使徒行伝 9:6–9）。

「キリストに従う者たちを迫害したとき、サウロは直接、天の神にたてついていたのである。キリストの弟子たちを告発し、彼らに敵して偽証を言いたてたとき、サウロは世の救い主に対して同じことをしていたのである。」（患難から栄光へ上巻 122）

b. アナニヤとはだれでしたか。イエスは彼に何をするようにお命じになりましたか（使徒行伝 9:10–12）。アナニヤはなぜこの命令に従うことに気乗りがしなかったのですか。またどのような再保証が与えられましたか（使徒行伝 9:13–16）。なぜ高等教育を受けていたサウロが、普通の人であるアナニヤに送られたのですか。

「天来の明るさがサウロの視力を取り去った。しかし、偉大な癒し主なるイエスは、ただちにそれを回復はされなかった。すべての祝福はキリストから流れる。しかし、彼はいまや地上におけるご自分の代表として教会を設立しておられ、悔い改めた罪人を命の道へ向ける働きはこれに属していた。サウロの滅ぼそうとしていたその人こそが、かつて彼がさげすみ迫害していた宗教における指示者となるのであった。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 29）

c. アナニヤはサウロにどのように話しましたか。また彼らの出会いをめぐり、どのような美しい勝利が達成されましたか（使徒行伝 9:17–19）。

「イエスは、パウロに〔教える〕働きをみな直接なすことがおできになったが、それはこのお方のご計画ではなかった。パウロは自分がかつて滅亡を計画していた人々に告白することにおいてなすべきことがあった。そして神はご自分の代わりに行動するように油を注がれた人々がなすべき責任ある仕事を持っておられた。パウロは改心において必要なこれらの段階をふまなければならなかった。彼はまさに自分がその宗教のために迫害してきた人々に結びつくことを要求されたのであった。キリストはここですべてのご自分の民に、人の救いのために働かれるご自分の方法の模範を残しておられる。神の御子はご自分の組織された教会の職務と権威にご自身を同一視しておられる。このお方の祝福はこのお方が油を注がれた代理者を通してもたらされ、こうして人々をこのお方の祝福のもたらされる水路に結びつけるのであった。パウロが聖徒たちを迫害した自分の働きにおいて厳密に良心的になったからといって、自分の残酷な行いを知り、神の御霊によって印象づけられたときに、無罪にするのではない。彼は弟子たちから学ぶ者になるのである。」（教会への証 3 巻 431, 432）

木曜日　7月4日

5.　バプテスマを受けてキリストの体へ

a.　サウロが従った過程は、なぜそれほど重要なものだったのですか（マルコ 16:16）。

「自分がかつて熱心に守っていると信じていた道徳律の光によって、サウロは自分が罪人の中の罪人であることを悟った。彼は悔い改め、つまり罪に死に、神の律法に対して従順になり、自分の救い主としてイエス・キリストを信じる信仰を働かせて、バプテスマを受け、かつてイエスを非難していたのと同じ真剣さと熱心さをもって、このお方を宣べ伝えた。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 31）

b.　なぜキリストは地上に組織を持っておられるのですか。また教会は何として知られるべきですか（マタイ 16:18, 19; テモテ第一 3:15）。

c.　なぜ、教会はイエスにとって、非常に尊いのですか（エペソ 5:25（下句）, 29, 30）。

「イエスは罪人の友であられる。このお方の心は彼らの苦悩によって動かされる。この方には天地における一切の権威がある。しかし、このお方はご自分が人の啓発と救いのために油を注がれた手段を尊重なさる。このお方は罪人を、ご自分が世への光の水路とされた教会へ導かれる。

サウロはイスラエルにおける博学な教師であった。しかし、彼の盲目的な過ちと偏見のただ中にあって、キリストはご自分を彼に表わされ、それから彼をご自分の教会との通信のなかに置かれた。……すべてキリストのみ名のうちに、その権威によってなされた。しかし、教会は通信の水路である。」（同上 31, 32）

金曜日　7月5日

個人的な復習問題

1. **ステパノの生涯に、わたしたちはどのように鼓舞されますか。**
2. **宗教人の手によるステパノの殉教はどのような態度を生じさせましたか。**
3. **神はなぜパウロの視力を回復するのに、アナニヤをお用いになったのですか。**
4. **なぜ、「とげを蹴る」ことはわりにあわないのですか。**
5. **何がサウロがバプテスマを受ける動機となりましたか。そして同様に、何がわたしたちを動機づけるべきですか。**

神によって選ばれ、立てられる

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためであり」（ヨハネ 15:16 上句）

「イエスは、わたしたちがまだ罪人であるときにわたしたちを愛してくださった。しかし、わたしたちを選んだうえで、このお方はわたしたちが行って実をむすぶために、わたしたちを立てたと仰せになる。各自に何かするべきことはあるであろうか。もちろん、キリストと共にくびきを担う人はみな、このお方の重荷を負い、このお方の分野で働かなければならない。」（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1894 年 12 月 17 日）

推奨文献： 患難から栄光へ上巻 166–177

日曜日　*7月7日*

1. 新しく改心した者

a.　パウロは改心の後、直ちに何をするように鼓舞されましたか（使徒行伝 9:20）。その反応を描写しなさい（使徒行伝 9:21–24）。

b.　パウロの命を守るために、まもなく何が必要になりましたか（使徒行伝 9:25）。

c.　パウロの信仰を強固にし、神からの召しを堅固な土台の上に確立するのに役立った重要な経験を説明しなさい（ガラテヤ 1:15–17）。

「〔パウロ〕はアラビヤへ入っていった。そして、そこではわりと孤独であって、神と交わり、熟考するための機会が十分にあった。彼は自分自身の心を探り、自分の悔い改めを深め、そして祈りと研究によって、引き受けるにはあまりにも大きくあまりにも重要だと思われた働きに携わる準備をするために、神とだけになりたいと熱望した。彼は人から選ばれたのではなく、神から選ばれた使徒であった。そして、彼の働きは異邦人の間のものになるとはっきり述べられた。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 33, 34）

2. はじめの愛を培う

a. アラビヤにおけるパウロの時間を特徴づけていたのは何でしたか。そして、彼の経験は他にだれを思い起こさせますか（詩篇 139:23, 24; 出エジプト記 2:15; 3:1）。

「モーセはエジプトの軍官学校で、武力の法則を教えられて、これが彼の品性に根強い影響を与えたために、彼がイスラエルを愛の法則で指導するのにふさわしい者となるには、神と自然との静かな交わりの中に四十年の長い年月を必要とした。これと同じ教訓をパウロも学ばなければならなかった。」（教育 63）

「アラビヤにおいて〔パウロ〕は、使徒たちと通信しなかった。彼は心を尽くして熱心に神を求め、自分の悔い改めが受け入れられ、自分の大きな罪が許されたことを確かに知るまでは安んじることをしないと決心していた。彼はこれからの自分の奉仕において、イエスが共にいてくださるという保証を得るまでは、戦いを止めようとしなかった。彼はつねに自分の体に、すなわち天来の光によって盲目にされた目の中にキリストの栄光のしるしを携えていくのであった。そして、彼もまた支えてくださるキリストの恵みの保証を絶えず身に帯びることを切望した。パウロは天と密接なつながりのうちに入り、イエスは彼と交わり、彼をその信仰のうちに確立し、彼にご自分の知恵と恵みを授けられた。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 34）

b. 神はなぜしばしば、指導者たちにご自分のための力ある働きに入る準備をさせるために、荒野での経験をお用いになるのですか（ヨブ 37:14; 詩篇 46:10）。

c. パウロの高い希望にもかかわらず、彼がついにエルサレムで指導的な兄弟に会う機会があったときに、どのような驚くべき失望に直面しましたか（使徒行伝 9:26; ガラテヤ 1:18, 19）。パウロの経験を非常にめずらしいものとしたのは何ですか。

「ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、神が自分たちを自国において同郷の人々の間でキリストを宣べ伝えるように任命されたことを確信していた。しかし、パウロは宮で祈っているときに、彼の広い伝道地がはっきりと彼の前に提示されたのであった。彼をその広大で重要な働きに準備するために、神は彼をご自分との密接なつながりのうちに入れ、彼のうっとりするような光景の前に、天の美しさと栄光のしるしを見せてくださった。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 41, 42）

3. すべての偏見を後にして

a. 使徒のうちにパウロが受け入れられるための道をつけたのはだれでしたか。またなぜこのエルサレムへの訪問は短くされなければならなかったのですか（使徒行伝 9:27–29; 22:17, 18）。さげすまれていた異邦人へのパウロの伝道を信徒たちがついに承認するよう促進したのは何でしたか（使徒行伝 8:26, 27, 38; 10:34, 35, 44–47）。

b. 自分の召しだと感じていたことに関して、祈りのうちにパウロはどのような論理を用いましたか。またその反応はどうでしたか。（使徒行伝 22:19–21）。教会は神の判断をこだまさることによって、どのように祝福されましたか（使徒行伝 9:30, 31）。

c. パウロは終わりの時代まですべての信徒の益のために、どのような時代を越えた原則を後に宣言しましたか。そして、この原則は、わたしたちにとってどのように警告となりますか（ガラテヤ 3:28, 29; コロサイ 3:11）。

「神はしかるべき働きをなすために人を選んでこられた。その人の知力は弱いかもしれないが、そうであれば神が働かれる証拠はより明らかとなる。彼の話は雄弁ではないかもしれないが、だからといって彼が神からのメッセージを持っていないという証拠にはならない。彼の知識は限られているかもしれないが、多くの場合、神はご自分の知恵をもってそのような代理人を通して働くことがおできになり、生来のあるいは習得した能力を持ち、それを知っていて自分にも、自分の判断力にも、自分の知識にも、自分の話し方にも自信がある人を通してよりも、もっと神の力が見られるのである。」（原稿ﾘﾘｰｽ 5 巻 244）

「偏見は神の御目に恐るべきものである。世の贖い主を十字架につけたのは偏見であった。民として、わたしたちはあらゆる偏見を捨てよう。なぜなら、それは思いを盲目にし、人が責めに価すると思う人々に対して正義を行うことをできなくするからである。偏見は人が内なる魂を読むことのできない、またもしできたとしても理解することのできない兄弟に対して裁きの座につかせる。不和を作り出したり、他の人を裁いたりする代わりに、わたしたちは教会員を天来の一致のうちに強い兄弟愛のひもによって共にたばねる必要がある。もし兄弟がぐらついている場合、彼の問題を兄弟の前に失望的な光のうちにおき、他の人たちを自分の道におくことによって、彼らがその人の多くの弱さを発見するようにすることは大きな罪である。これはサタンのやり方であり、キリストの精神とはまったく調和しない。」（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1893 年 10 月 24 日）

4. ぶどう畑は広がる……

a. パウロはキリストのための自分の当初の働きについて何と言っていますか（ガラテヤ 1:20–24）。

b. その一方、ユダヤの北の都市では、キプロス（地中海の島）でさえ、何が起こっていましたか。それは、なぜですか（使徒行伝 11:19–21）。まもなく、どのような必要が明らかになりましたか（使徒行伝 11:22–24）。

c. 共労者として、バルナバはだれを探しましたか。そして一年のうちに、彼らの共同の働きはどのような反響をもたらしましたか（使徒行伝 11:25, 26）。わたしたち一人びとりにとって、このことはどのように刺激となりますか（ヨハネ 15:16）。

「イエスは多くの伝道者、すなわち自らを神に捧げる男女、ご自分の奉仕のために喜んで用い、用いられる人を召しておられる。ああ、わたしたちはここが働くための世界だということを覚えていられないのであろうか。神にご自分の助け手としてわたしたちを用いていただき、一歩一歩前進しないのであろうか。奉仕の祭壇に自らを捧げないのであろうか。そのとき、キリストの愛がわたしたちの琴線に触れ、わたしたちを変えて、このお方のために喜んでことをなし、敢然と立ち向かうものとする。」（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1903 年 1 月 27 日）

「5 時になって、主はご自分の奉仕に多くの忠実な働き人を召し入れられる。自己犠牲的な男女は、背信や死によって空いた場所に踏み込む。若い男女にもまた年上の人々にも同様に、神は上よりの力を与えてくださる。改心した思い、改心した手、改心した足、また改心した舌、すなわち神聖な祭壇から生きた炭に触れられた唇をもって、彼らは主人の奉仕へと出て行き、着実に前へ上へと進んでいき、完成に至るまで働きを前進させるのである。」（ﾕｰｽ・ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ 1902 年 2 月 13 日）

「熱心さを持った青年たちが、自分たちの働きをまだ真理に目覚めたことのない都市へ、村へ、町へと広げるために資格を備え、宣教師たちが自発的に他国へ真理を伝えるために出て行くとき、諸教会は、自分自身が経験のない青年たちの働きを受けるよりもはるかに励まされ、強められる。」（教会への証 3 巻 204）

木曜日 *7月11日*

5. 公に認められた召し

a. アンテオケの地元の教会で、預言者や教師たちに、神は何をお伝えになりましたか（使徒行伝 13:1, 2）。教会はただ祈りと断食とをもって神への畏れのうちに、そのような段階を取ることができるということを、何が明らかにしていますか（使徒行伝 13:3）。

「これらの使徒〔バルナバとサウロ〕は、異教徒の地域に宣教師としてつかわされる前に、断食して祈り、按手によって厳粛に神にささげられた。こうして彼らは、教会の完全な権威をさずけられ、真理を教えるばかりでなく、バプテスマの式をあげたり、教会を組織したりする資格を教会から与えられた。……

パウロとバルナバのふたりは、既に神ご自身から任命を受けていたので、手を置く儀式は、新しい恩恵や実際の資格を付け加えるものではなかった。それは任命された職務を認定することであり、その職務における権威を認知するものであった。」（患難から栄光へ上巻 173, 174）

b. パウロは、この厳粛な任命をどのように考えましたか（ローマ 1:1）。

「パウロはこの正式の按手の式を、彼の生涯の働きにおける、新しい重要な時期の始まりを示すものと見なした。彼はのちにこの時を、キリスト教会における使徒としての、自分の任務の始まりの日と定めている。」（同上 176）

c. 教会の奉仕へ正式に立てられる神聖な召しについて悟るべき、いくつかの鍵となる点は何ですか（テモテ第一 5:22; イザヤ 52:11（下句））。

金曜日 *7月12日*

個人的な復習問題

1. なぜ、神はパウロをアラビヤに送られたのですか。
2. わたしたちはどのように、他の人々を使徒たちがパウロにしたように取り扱う危険性がありますか。
3. わたしの偏見が、どのように神のみわざをさまたげるかもしれませんか。
4. 5時に明らかにされるべき、まもなく起こる光景を描写しなさい。
5. 正式に立てるために名前が挙げられるとき、それが執事であっても、長老であっても、牧師であっても、どのような厳粛な義務がすべての教会員にありますか。

世俗的な思いの民と働く

「〔パウロとバルナバは、デルベ〕の町で福音を伝えて、大ぜいの人を弟子とした後、ルステラ、イコニオム、アンテオケの町々に帰って行き、弟子たちを力づけ、信仰を持ちつづけるようにと奨励し、『わたしたちが神の国にはいるのには、多くの苦難を経なければならない』と語った。」（使徒行伝 14:21, 22）

「だれ一人として、敵の手に敗北することを恐れる必要はない。なぜなら、すべての悪魔的な感化力に持ちこたえることのできる上よりの十分な力を授けられることは福音の働き人の特権だからである。」（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1911 年 5 月 18 日）

推奨文献： 患難から栄光へ上巻 190–202

日曜日　*7月14日*

1.　開始する

a.　パウロとバルナバは自分たちの使命をどこで始めましたか。そして彼らに伴った青年はだれでしたか（使徒行伝 13:4, 5; 12:12, 25）。

b.　宣教師たちはパトモスでどのような難問に直面しましたか（使徒行伝 13:6–8）。

「一つの戦いもなしに、地上に神の国が建設されるのをサタンは許さない。悪の勢力は、福音宣伝のために定められた機関に絶えず戦いをいどみ、暗黒の力は、名声のある、真に高潔な人々に真理が宣べ伝えられる時、特に活発に働く。クプロの総督セルギオ・パウロが福音のメッセージを聞いた時も同様であった。総督は、使徒たちが携えてきたメッセージを学ぶために彼らを迎えにやった。すると、悪の勢力が魔術師エルマを通じて働き、彼らの悪意をこめた暗示によって彼を信仰からそらし、神の目的をくじこうとした。

このように、堕落した敵は、改宗すれば神のために有能な奉仕をするかもしれない影響力のある人々を、悪の列に加えようと、たえず働くのである。」（患難から栄光へ上巻 179）

2. 勇気の必要

a. 主は、パウロが魔術師エルマの妨害に対処したとき、どのような驚くべき大胆さをもって霊的に祝福してくださいましたか（使徒行伝 13:9–12）。

「パウロは、サタンに激しく悩まされたけれども、敵の手先となっている者を譴責する勇気を持っていた。……

魔術師はこれまで、福音の真理の数々の証拠に目をつむっていた。そこで神は正義の怒りから、彼の肉眼を閉じさせて日の光を見えなくさせられたのである。この盲目は永久的なものではなく、一時的なものであった。それは彼に悔い改めをうながし、彼がはなはだしく背いた神に、ゆるしを求めさせるためであった。……

エルマは教育を受けた者ではなかったが、サタンの仕事をするのに特に適していた。神の真理を説く人たちは、さまざまな違った形でずるい敵に会うのである。」（同上 179, 180）

b. 使徒たちは、次にどこへ福音の種を植え付けましたか。またヨハネ・マルコに何が起こりましたか（使徒行伝 13:13）。新しく宣教師を目指す多くの人の場合と同様に、なぜこの青年に困難が伴っていたのですか（テモテ第二 2:3）。

「パウロとバルナバは、神の救いの力に頼ることを既に学んでおり、ふたりの心は滅びゆく魂への熱烈な愛に満たされていた。いなくなった羊を捜している忠実な羊飼いのように、彼らは自分たち自身の安楽や都合などは少しも念頭に置かなかった。自己を忘れ、疲れや飢えや寒さにもひるまなかった。彼らは、おりから遠くへさまよい出た人々の救いという、たった一つの目的しか心に留めていなかった。

マルコはここで、不安と落胆にくじけてしまって、主の働きに全心全霊を打ちこんで献身するという彼の目的が、一時ぐらついた。彼は困難に慣れていなかったので、道中の危険と窮乏に気力を失ってしまったのである。彼はこれまで順調な境遇のもとに働いて成功してきたが、いま開拓伝道者たちにしばしばつきまとう反対と危険のさなかにあっては、十字架のよき兵士として困難に耐えることができなかった。」（同上 181）

「マルコはキリスト教の信仰から背信したわけではなかった。しかし、多くの若い牧師のように、彼は困難にしり込みし、旅や働きや伝道地の危険よりも家郷の快適さと安全を選んだ。この放棄によって、パウロは彼を長い間好ましくないものと厳しく判断するようになった。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 46, 47）

3. 新しい安息日遵守者が信徒に加わる

a. パウロとバルナバはアンテオケのどこで説教を始めましたか。またそれを最も喜んだのはだれであり、最も喜ばなかったのはだれですか（使徒行伝 13:14, 42–45）。

b. このような強い反対に直面した信徒たちの態度を描写しなさい（使徒行伝 13:46–52）。わたしたちはキリストがこの戦いを予見し、ご自分に従う忠実な者たちへ勧告された方法から何を学ぶべきですか（マタイ 10:23）。

「『法廷に呼び出されたとき、わたしたちはそれによって神と衝突するのでない限り、自分たちの権利を放棄すべきである。わたしたちは自分たちの権利を嘆願しているのではない。そうではなく、わたしたちの奉仕に対する神の権利のためである。わたしたちに課された不正な刑罰に抵抗する代わりに、次の救い主のみ言葉に注意を払う方が良い〔マタイ 10:23 引用〕。』」（ｽﾊﾟﾙﾃﾞｨﾝｸﾞ・ｱﾝﾄﾞ・ﾏｰｶﾞﾝ・ｺﾚｸｼｮﾝ 26）

c. パウロとバルナバは次にどこへ行きましたか。そこで彼らは何を見出しましたか（使徒行伝 14:1, 2）。わたしたちはそれにもかかわらず、彼らの成功から何を学ぶことができますか（使徒行伝 14:3）。

「使徒たちの友人は、不信者であったにも関わらず、〔パウロとバルナバ〕に悪意あるユダヤ人の計画について警告し、むだに自らを彼らの怒りにさらすことなく、命を救うために逃げるよう彼らに強く促した。それに従って、彼らは隠密にイコニオムから離れ、キリストの教理に勝利を与えてくださることを神に信頼して、忠実な者と反対者のグループに自分たちで戦うよう任せた。しかし、彼らは決してイコニオムから最終的に離れたのではなかった。彼らはそのときに起こっていた興奮が弱まった後に戻ることを申し出て、自分たちが始めた働きを完成したのであった。

神の律法の拘束力のある要求を守り、教える人々はしばしば、ある程度イコニオムでの使徒たちと同じような扱いを受ける。彼らはしばしば神のみ光を頑固に拒む牧師や人々、すなわち誤り伝えたり偽ったりすることによって、真理の使命者が人々に近づくことのできる戸をみなふさぐ人々からの苦々しい反対に直面する。……

使徒たちは、その働きにおいて、いろいろな階級の人々やあらゆる種類の信仰や宗教の人々と会った。彼らはユダヤ人の偏狭さや狭量、魔術、冒涜、自分たちの権力を行使したい裁判官、偽の羊飼い、迷信、偶像礼拝の反対に直面した。迫害と反対が彼らの四方にあったが、なお勝利は彼らの努力を冠し、改心者が日々信仰へと加えられた。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 54, 55）

4. ルステラとデルベ

a. パウロとバルナバはなぜすぐにイコニオムから移る必要が生じたのですか。またこの新しい地域の特徴は何でしたか（使徒行伝 14:4–7）。

「ルカオニヤの町々、ルステラ、デルベ……は異教徒たち、すなわち迷信深い人々が住んでいた。しかし、彼らの中にはキリストの教理を聞き、受け入れる魂があるのであった。使徒たちはこれらの町々で働くことを選んだ。なぜなら、彼らはそこではユダヤ人たちの偏見や迫害にあわないからであった。彼らは今、まったく新しい要素―異教的な迷信と偶像礼拝―と接触することになった。……

ルステラには数人のユダヤ人がいたにもかかわらず、ユダヤ人の会堂がなかった。そこではゼウスの神殿が人目を引く場所を占めていた。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 55）

b. 人の信仰がどのように福音を聞いてそれを力強くつかむことができるか模範を挙げなさい（使徒行伝 14:8–10）。この奇跡をながめた熱心ではあるが無知な人々の反応はどのようなものでしたか（使徒行伝 14:11–13）。

「パウロとバルナバは共に町に現われ、大いなる力と弁舌をもってキリストの教理を教えていた。惑わされやすい人々は彼らが、天から下ってきた神々だと信じた。使徒たちが自分たちの周りに人々を集めて、彼らの変わった信仰を説明していると、ゼウスの礼拝者たちはこれらの教理を、できるかぎり、自分たち自身の迷信的な信仰と結びつけようとした。」（同上）

c. このような誤解を続かせないことは、なぜ非常に重要なのですか（使徒行伝 14:14–18; コロサイ 2:8; 黙示録 22:8, 9）。

「お世辞を受けてはならない。たとえあなたの宗教生活においてでもである。お世辞は自分自身についての高い評価で人をあざむき、高ぶらせるためにサタンが待ち構えてしかける巧みなわざである。〔コロサイ 2:8 引用〕。……賞賛、お世辞、そして放縦は、尊い魂を誤った道へ導くのに、サタンが仕掛ける他のどんなわざよりも多くのことを成し遂げてきた。

お世辞は世の方策の一部であるが、キリストの方策にはまったくない。お世辞を通して、弱点と弱さに満ちた哀れな人間は、自分たちに能力があり、価値があると思うようになり、自分たちの肉の思いにおいて高ぶるようになる。」（ｸﾘｽﾁｬﾝ教育の基礎 304）

木曜日 *7月18日*

5.　神が支配なさる

a.　ルステラでの奇跡によって激怒し、まもなくだれが到着しましたか。またどのような悪行によって、彼らは失望した異教徒たちを動員しましたか（使徒行伝 14:19）。

「使徒たちに犠牲を捧げるという特権を拒まれた異教徒たちが経験した失望は、これらの神の牧師たちを神だと賞賛した熱狂に迫るほどの熱烈さをもって彼らに敵対させるのであった。悪意に満ちたユダヤ人たちは、この異教徒たちの迷信と信じやすさを思う存分利用して、自分たちの残酷な計画を実行に移すのをためらわなかった。彼らは武力で使徒たちを攻撃するように彼らをあおりたてた。そして彼らにパウロに語る機会を与えれば民を惑わすであろうと断言して、そうしてはならないと命じた。

ルステラの人々は、大いに逆上し、憤激して使徒たちをめがけてきた。彼らは乱暴に石を投げつけた。そしてパウロは傷つき、打ちのめされ、気を失いながら、自分の終りが来たと感じた。ステパノの殉教と自分がそのできごとで果たした残酷な役割が生々しく記憶に戻った。彼は一見死んだかのように地面に倒れた。そして、激高した大衆は無感覚の体を引きずって町の門を通り、それを壁の下に投げ落とした。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 60, 61）

b.　どのような驚くべき奇跡が、神の祝福を確認しましたか（使徒行伝 14:20–23）。この摂理による行為は、どのように押し進むよう使徒たちを大いに励ましましたか（使徒行伝 14:24–28; マラキ 3:16, 17）。

「テモテはパウロの働きを通して改心したが、このできごとにおける使徒の苦難を目の当たりにした。彼は一見死んだかのような体のそばに立ち、彼が傷つき、血だらけになりながら、その唇には不平やつぶやきではなく、キリストがご自分のみ名のゆえに苦しむことを許されたことをイエス・キリストに賛美して、起き上がるのを見た。」（同上 62）

金曜日 *7月19日*

個人的な復習問題

1.　わたしたちの宣教師たちのために祈ることが、なぜ重要なのですか。
2.　わたしたちはヨハネ・マルコの人間的な弱さから、どの教訓を学びますか。
3.　わたしたちはみな、律法のない世界に神の律法を教えるとき、何を予期することができますか。
4.　この教訓は異教徒の変わりやすい性質をどのように明らかにしていますか。
5.　神はパウロの態度も働きも、どのように是認なさいましたか。

真理を求めて叫ぶ魂たち

「ここで夜、パウロは一つの幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が立って、『マケドニヤに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい』と、彼に懇願するのであった。」（使徒行伝 16:9）

「神は、神の側にしっかり立ち、ナザレのイエスと一体となって、今、しかり、たった今しなければならない働きに携わることを誓う人々を召しておられる。」（青年への使命 194）

推奨文献： 患難から栄光へ上巻 203–212

日曜日　*7 月 21 日*

1.　世界総会

a.　初期教会の世界総会において特に重要であった議題で一番先に上がっていた問題は何でしたか（使徒行伝 15:1–6）。

「異邦人、特にギリシヤ人は非常に放縦で、ある者は、心の中では改心せず、悪い習慣を捨てずに信仰を告白するおそれがあった。ユダヤ人のクリスチャンは、異教徒には犯罪とはみなされていないような行為を不道徳と考え、寛大に扱うことができなかった。それゆえに、ユダヤ人は、割礼や礼典律の遵守を異邦人の改宗者たちに実行させて、改宗の真実性と献身の試金石とするのがよいと、強く主張した。こうすれば、心から改宗せずに真理を受け、のちになって不道徳、不節制な行為のために恥辱となるような人々を、教会に加えずにすむと、彼らは信じた。

ここで争われている主要な問題を解決するために、考えなければならないさまざまな問題点は、克服しがたい困難さを会議の前にもたらしたように見えた。しかし、その決定次第では、キリスト教会の繁栄、あるいはその存在そのものすら左右されようというこの問題は、実際には既に聖霊によって解決されていた。」（患難から栄光へ上巻 207）

b.　議論のさなかで、ペテロはこの問題についてどのように発言しましたか（使徒行伝 15:7–11）。

2. 鍵となる決定

a. パウロとバルナバはエルサレムの集会で、どのような知らせを報告しましたか（使徒行伝 15:12）。わたしたちは議長であったヤコブがこれらの知らせを、決議を形成するのに適用した方法から何を学ぶべきですか（使徒行伝 15:13–21）。

「聖霊は、改宗した異邦人に、礼典律の実行を義務づけない方がよいと見られた。この問題に関する使徒たちの考えも、神のみ霊の考えと同じであった。ヤコブは会議において議長をつとめていたが、彼の最終的決定は『そこで、わたしの意見では、異邦人の中から神に帰依している人たちに、わずらいをかけてはいけない』（使徒行伝 15:19）ということであった。

これで話し合いは終わった。この例を見れば、ローマ・カトリック教会が教えるようにペテロが教会の頭ではなかったことがわかる。法王のように、ペテロの継承者だと主張してきた人々には、その主張に対する聖書的な根拠がない。ペテロの生涯において、彼が神の代理者として兄弟たちの上位にあがめられたという主張を是認するようなものは、何もない。ペテロの継承者だと宣言している人々が彼の模範に従っていたならば、彼らは常に兄弟たちと同等の立場にとどまることで満足していたはずである。」（同上 209,210）

b. 集会は、どの結論に賛同しましたか（使徒行伝 15:22–31）。異邦人のクリスチャンでさえ、動物の血を用いることをやめるべきことは、なぜそれほど重要だったのですか（創世記 9:1–4; レビ記 3:17）。

「この〔異邦人たちに礼典律の実行を義務づけるかどうかの〕問題に関する採決のために、クリスチャン全員が召集されたのではない。影響力と判断力のある『使徒たちや長老たち』が通達を書き、発行した。そして、それはキリスト教会に広く受け入れられたのである。しかし、すべての者がこの決定に満足したわけではない。この決定に反対した野心的で、自信の強い兄弟たちの党派があった。これらの人々は、独断でみわざに携わっているという態度をとり、しきりに激しくつぶやき、あらを探し、新しい計画を持ち出して、福音使命を伝えるよう神から任命されていた人々の働きをくずそうとした。教会は最初からそのような障害に会ってきたのであるが、これは、今後も常に、終わりの時まで続くであろう。」（同上 211, 212）

c. すべての者が自分たちの代表する働きの伝道地へ帰る時が来たとき、何がパウロとバルナバの間の議論を引き起こしましたか（使徒行伝 15:36–38）。

3. 新しい共労者たち

a. まもなく、パウロはシラスと共にどのような任務を引き受けましたか。そして、パウロがまもなく自分たちのグループに加えた青年はだれでしたか（使徒行伝 15:39–41; 16:1–3）。

b. パウロはなぜマケドニヤのピリピに行こうと強く心を動かされましたか（使徒行伝 16:9–12）。どのような意味において、わたしたちの時代にまで、この「マケドニヤの叫び」がこだましていますか（ヨハネ 4:35; イザヤ 6:8）。

「世界中の男女は何かを求めて天を仰いでいる。光と恵みと聖霊を求める魂から、祈りと涙とねぎごとが天にのぼっていく。多くのものは、み国の入口に立って、刈り集められるのを待つばかりになっているのである。」（同上 114）

「神はもし人生をつつましく歩んでいる人々が自らをご自分の奉仕へ捧げるならば、もっと多くの働き人を受け入れてくださる。人生のあらゆる大路やかきねに真理を伝えるために男女が現れるべきである。すべての人が長い教育課程を経ることができるわけではないが、もし彼らが神に献身し、このお方から学ぶならば、それがなくても多くの人々が他の人々を祝福するために多くをなすことができる。もし彼らが神に自らを捧げるならば、何千もの人々が受け入れられるであろう。この分野で労するすべての人が援助を求めて教会に頼るべきではない。できる者には、自分の時間や持っている能力を捧げさせ、神の恵みの使命者とならせなさい。彼らの心はキリストの大いなる愛の心と一つになって脈打ち、彼らの耳はマケドニヤの叫びを聞くために開いている。」（ｻｻﾞﾝ・ﾜｰｸ 16, 17）

c. わたしたちはこの忙しい世代において、ルデヤが使徒たちにとって祝福であったことがわかった方法から、どのように鼓舞されますか（使徒行伝 16:14, 15, 40; ペテロ第一 4:9）。

「ルデヤ……もその家族も改心してバプテスマを受け、また、彼女の家に泊まるようにと彼女は使徒たちに懇望した。」（患難から栄光へ上巻 228）

「わたしたち自身の民の間で、もてなしの心を表わすことが特権であり祝福であると見なすべきほどに見なされていない。あまりにも社交性がなく、あまりにも家族の食卓に困惑や仰々しさなく二人か三人のための場所を作ろうとする気持ちがない。ある人々は、『あまりにも大変だ』と訴える。もしあなたが、『特別な用意はありませんが、わたしたちのあるもので歓迎します』と言うなら、大変なことではない。突然の来客にとって、歓迎は最も手の込んだ準備よりもはるかにありがたいのである。」（教会への証 6 巻 343）

4. 模範によって証する

a. パウロとシラスはなぜ投獄されたのですか。また、彼らはどのように扱われましたか（使徒行伝 16:16–24）。彼らはそこで何をしましたか（使徒行伝 16:25）。

「〔ピリピの地下牢にいた間〕、使徒たちは非常に苦痛な状態に置かれていた。ずたずたに裂かれ、血の流れていた彼らの背中は、ごろごろした石の床に接触し、一方彼らの足は上げられて、丸太に固く縛られていた。このような不自然な格好で彼らははなはだしい拷問に苦しんだ。しかし、彼らは不平を言ったり文句を言ったりせずに互いに会話し、励ましあい、神の愛するみ名のために恥辱を受ける価値のある者として見出されたことへの感謝の心で神を讃美した。パウロには自分が器となってキリストの弟子たちの上に積み上げた迫害のことが思い出された。そして、彼は神の御子の福音の栄光に満ちた真理を見るために自分の目が開かれ、感じるように心が開かれたこと、また自分がかつてはさげすんでいた教理を宣布する特権を与えられたことを心から感謝した。

黒一色の暗闇と地下牢の孤独の中で、パウロとシラスは神に祈り、讃美の歌をうたった。他の囚人たちは驚きをもって、牢獄の中から発せられる祈りと讃美の声を聞いた。彼らは夜間に牢獄の沈黙を破る金切り声やうめき声がのろったり、罵ったりするのを聞くのになれていた。しかし、彼らは陰鬱な独房から祈りや讃美の言葉を聞いたことはかつてなかった。獄吏や囚人たちは、寒くて、飢えて、拷問を受けながら、なお喜び、快活に互いに言葉を交わすことのできるこれらの人はだれだろうと驚いた。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 75, 76）

b. パウロとシラスが地下牢の中で神を讃美したとき、何が起こりましたか（使徒行伝 16:26–34）。これはわたしたちに何を教えますか（マタイ 5:44–46）。

「使徒たちは、地震が牢獄の扉を開き、彼らのかせをほどいたときに、逃げることもできた。しかし、それでは自分たちが囚人であることを認めることになり、キリストの福音の恥辱となるのであった。……

「ピリピの人々は使徒たちのとった行動、特に彼らを迫害した裁判官に対して、より高等な権力者に訴えることを差し控えたことにおける彼らの高潔さと寛容さを認めずにいられなかった。彼らの不正な投獄と奇跡的な救出の知らせは、その地域全体を通じて広まり、使徒たちと彼らの働きは、それがなければけっして伝えられなかったほど多くの者に知られるところとなった。」（同上 80, 81）

木曜日 *7月25日*

5. 喜んで実を結ぶ

a. 使徒たちはなぜ急いでいたわけではないのに、ピリピを去ったのですか（使徒行伝 16:35–39）。やがて、ピリピにおけるパウロの働きの実は何でしたか（ピリピ 1:1, 2）。

「ピリピにおけるパウロの働きは、そこに教会を設立する結果となった。その教会員の数は着実に増していった。彼の熱心と献身、何にもまして、キリストのために喜んで苦しみを受ける態度は、信仰へと改心した人々に深く持続する感化力を発揮した。彼らは使徒たちがこれほどの犠牲を払った尊い真理を高く評価し、彼ら自身、自分たちの贖い主のみ事業のために、心を尽くして献身した。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 81）

b. パウロはピリピの信徒たちをどのように考えましたか。また彼らの直面することになる迫害に関して、彼らにどのように強く勧めましたか（ピリピ 1:3–7, 27–30）。

c. ピリピの人々のように、わたしたちは何に焦点を当てるべきですか（ピリピ 2:5–11; 4:6–8）。パウロの証は、わたしたちをどのように鼓舞しますか（ピリピ 3:7–11）。

「ペンテコステの日の聖霊の降下は、前の雨であった。しかし、後の雨は、いっそう豊かに降りそそぐことであろう。聖霊は、わたしたちが聖霊を求めて、受けることを待っておられる。聖霊の力によって、キリストの完全なみかたちが、もう一度、あらわれなければならない。人びとは、高価な真珠の価値を認めて、使徒パウロとともに、『しかし、わたしにとって益であったこれらのものを 、キリストのゆえに損と思うようになった。わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている』と言うであろう（ピリピ 3:7, 8）。」（キリストの実物教訓 98, 99）

金曜日 *7月26日*

個人的な復習問題

1. **ユダヤ人のクリスチャンは、なぜ異邦人に割礼を受けさせることにこだわったのですか。**
2. **神は直面している問題を正すために集会をどのように導かれましたか。**
3. **たとえもしわたしたちがマケドニヤの叫びに応えられなかったとしても、ルデヤはどのようにわたしたちを鼓舞しますか。**
4. **ピリピの獄吏とその家族は、なぜ改心へと心がやわらげられたのですか。**
5. **パウロのどの態度が、後の雨を受けるために必要とされていますか。**

安息日 2013 年 8 月 3 日

第一安息日献金

伝道学校のために

神は救いに至る知恵の源であられ、この遺産は神の教会を通して、世界へと伝えられなくてはなりません。教会は、キリストから学び、救いの真理を人類同胞へ伝えることによって、この使命を果たしたいと願う謙遜で教えを受ける心をもつ僕によって構成されています。「それは、異邦人が、福音によりキリスト・イエスにあって、わたしたちと共に神の国をつぐ者となり、共に一つのからだとなり、共に約束にあずかる者となることである。わたしは、神の力がわたしに働いて、自分に与えられた神の恵みの賜物により、福音の僕とされたのである。すなわち、聖徒たちのうちで最も小さい者であるわたしにこの恵みが与えられたが、それは、キリストの無尽蔵の富を異邦人に宣べ伝え、更にまた、万物の造り主である神の中に世々隠されていた奥義にあずかる務がどんなものであるかを、明らかに示すためである」（エペソ 3:6–9）。

この任務を果たすことができるために、神の民は、「教をうけた者のように聞かせられ」、聞いたことを自分自身の生活に適用し、それからこの情報をできるかぎり真剣で説得力のある方法で他の人々へ伝えるべきです。「そして、あなたが多くの証人の前でわたしから聞いたことを、さらにほかの者たちにも教えることのできるような忠実な人々に、ゆだねなさい」（テモテ第二 2:2）。

真理を教える能力を生まれつき持っている人は非常にまれです。わたしたちのうちほとんどの人は、研究と集中的な訓練によって技能を修得する必要があります。そして教会はどのようにこの使命を適切に果たすかを教会員に教える責任を担っているのです。

「真の教育とは伝道者を養成することであって、神のむすこ、娘はすべて伝道者となるように召された者である。わたしたちは神と人とに奉仕するために召されている。そしてこの働きに適した者となることが、わたしたちの教育の真の目的でなければならない」（ﾐﾆｽﾄﾘｰ・ｵﾌﾞ・ﾋｰﾘﾝｸﾞ 364）

ですから、学校が必要とされています。すでにある学校はさらに発展し、維持され、また新しい学校が建てられるべきです。世界中のすべての信徒たちは、伝道学校のための献金が集められるときに、惜しみなく捧げることによって、この重要なみ事業を自由に分かち合うことができます。神様が皆さんを祝福してくださいますように。

世界総会教育支部

テサロニケ、ベレア、そしてアテネ

「かえって、わたしたちは神の信任を受けて福音を託されたので、人間に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を見分ける神に喜ばれるように、福音を語るのである。」（テサロニケ第一 2:4）

「キリストの使命者たちは、自らを見張りと祈りで武装し、信仰と堅固さと勇気をもって前進し、そしてイエスのみ名のうちに、使徒たちのように自分たちの働きを根気よく継続しなければならない。彼らは世に警告の調子を響かせ、律法の違反者たちに、何が罪であるかを教え、彼らにその大いなる唯一の治療法としてイエス・キリストを指し示さなければならない。」（パウロの生涯からのスケッチ 86）

推奨文献： 患難から栄光へ上巻 244–261

日曜日　*7月28日*

1.　真理と結果

a.　マケドニヤの別の町であるテサロニケにパウロがはじめて到着したとき、彼を通して、どのようなキリストのための勝利が得られましたか（使徒行伝 17:1–4）。

b.　何人かの不信者のユダヤ人が、信徒たちを悩ませた方法から、わたしたちは何を学ぶべきですか（使徒行伝 17:5–8; ペテロ第一 4:12–16）。

「わたしたちの時代に人気のない真理を説く人々は、使徒たちのように、断固とした抵抗に直面する。彼らは、自称クリスチャンたちの大多数から、パウロが自分のユダヤ人の兄弟たちから受けた扱いより好ましい扱いを受けることは期待できない。彼らに敵対する反対要素の一致が起こるであろう。なぜなら、互いに心情や宗教的な信仰においてはどれほど違った組織であろうと、彼らの力は神の律法における第四条を足の下に踏みにじることにおいて結合するからである。

自ら真理を受け入れない人々は、他人がそれを受けることがないように最も熱心である。そして辛抱強く偽りを作り出すのにこと欠かない人々は、神の真理を効力のないものとするために、人の卑劣な感情をかきたてるのである。」（パウロの生涯からのスケッチ 86）

2. 素直（高潔）なベレヤの人々

a. 自分に対する偽りの主張にもかかわらず、パウロはテサロニケにおける自分の実際の福音宣教の方法を、どのように述べましたか（テサロニケ第一 2:1–8）。なぜ、その町における彼の時代は、成功だとみなすことができるのですか（テサロニケ第一 1:5–10）。

「パウロはアドベンチストであった。彼はテサロニケの人々の思いにけっして消し去ることのできない深い印象を残すような力と論証とをもってキリストの再臨という重要なできごとを提示した。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 83）

b. 夜、兄弟たちがパウロとシラスを送り出した町ベレヤにいたユダヤ人について、どのような所見が述べられましたか。ベレヤの人々は今日わたしたちにとって、どのような刺激となることができますか（使徒行伝 17:10–12）。

「ベレヤの人々の思いは偏見によって狭められておらず、彼らは使徒たちによって説かれた真理を喜んで調べ、受けいれようとした。もしわたしたちの時代の人々が高潔なベレヤの人々の模範に従い、日々聖書を調べ、自分たちにもたらされたメッセージをそこに記されていることと比べるならば、今日神の律法に忠実な人が一人しかいないところに、千人いることであろう。」（同上 88）

「高潔なベレヤの人々のように、わたしたちは注意ぶかく、祈りをもって、神の仰せになったことに精通するために、聖書を調べるべきである。わたしたちは牧師や教会やあるいはだれか個人的な友人が何を言うかではなく、主が何と仰せになるかを尋ねるべきである。」（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1885 年 11 月 26 日）

c. ベレヤのユダヤ人の多くが真理によって深い印象を受けたことを聞き、テサロニケの不信者のユダヤ人たちは、どのような行動をとりましたか（使徒行伝 17:13）。

「テサロニケの不信者のユダヤ人たちは使徒たちへの嫉妬と憎しみに満たされ、彼らをテサロニケでの働きから追い出すだけでは満足せず、彼らをベレヤまで追いかけ、そこでもまた下層階級の人々の興奮しやすい感情をかきたて、彼らに暴力を振るわせた。真理の教師たちは再び働きの伝道地から追い出された。町から町へと迫害がついてまわった。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 88）

3. アカヤの地域へ

a. テサロニケにおける迫害のゆえに、兄弟たちは、パウロをどうすることに決めましたか（徒行伝 17:14, 15）。

「忠実な使徒は、エルサレムでの幻の中で自分に表わされたとおりに神のご目的を実行するために、着実に押し進んだ。『行きなさい。わたしが、あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ』（使徒行伝 22:21）。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 88, 89）

b. パウロはアテネでシラスとテモテを待ちながら、どのように感じましたか（使徒行伝 17:16）。

「アテネの町は異教の国のメトロポリスであった。パウロはここでルステラのように、無知でだまされやすい大衆に会ったのではなかった。彼はその知性と教育で有名な人々と対面した。……

パウロが自分を取り囲む美しく堂々とした人々を見、また偶像のひしめく町を見たとき、彼の霊は、いたるところで名を汚されているのを見た神への熱心さにかきたてられた。

彼の心は、見事なメトロポリス市民たち、すなわちその知力の偉大さで知られながら、偶像礼拝にわたされている人々への深い憐れみのうちに注ぎ出された。……

彼が都市の壮麗さとその高価な意匠を見たとき、その芸術と科学を愛する人々の思いを支配する魅惑的な力を悟った。彼の思いはアテネにおいて自分の前にある働きの重要さに深い印象を受けた。神が礼拝されていない大都市における彼の孤独は耐えがたいものであった。そこで彼は自分の同労仲間の同情と助けを切望した。人間の交わりに関して言えば、彼は全く自分が孤立していると感じた。テサロニケに宛てた彼の書簡の中で、彼は次のような言葉で自分の気持を表現している。『わたしたちだけがアテネに留まる』（テサロニケ第一 3:1）。」

「パウロの働きは、神とそのご計画について知的な理解のない人々に救いの知らせを担うことであった。彼が旅をしたのは、観光の目的でも、また新しく変わった光景を求める不健全な願望を満たすためでもなかった。彼の思いが意気消沈したのは、アテネの人々の思いに伝えるのに克服しがたいように見える障害が現れたからであった。」（同上 89, 90）

c. パウロは、この非常に哲学に傾倒したギリシャ人の前で、どのような難題に直面しましたか（コリント第一 1:22）。

4. 理論と論法

a. なぜパウロはアテネにおいて好奇心の源だったのですか（使徒行伝 17:17–21）。

「アテネ人の宗教は、彼らが大いに誇っていたが、何の価値もなかった。なぜなら、それは真の神の知識に欠いていたからである。それはほとんどの部分が、芸術崇拝と放縦的な娯楽と祭りのくり返しから成り立っていた。それには真の信心という徳に欠乏していた。本物の宗教は人間に自己に対する勝利を与える。しかし、単たる知性と嗜好の宗教は、その所有者を自分の性質の悪に超越させ、神に結びつけるために不可欠な資質に欠けている。……

自分の知性的な教養の程度を誇っていた者が、彼と言葉を交わし始めた。これによりすぐに彼らの周りに聴衆の人だかりが集まった。何人かは使徒を社会的にも知性においても自分たちにはるかに劣る者として馬鹿にしようとしていた。……

ストア哲学者や快楽主義者が彼に対面した。しかし、彼らや彼と接触するようになった他のすべての者は、まもなく彼には彼ら自身よりも大きな知識の蓄えがあることがわかった。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 91, 92）。

b. パウロは自分の訴えにおいて、どのような論法を用いましたか（使徒行伝 17:22–31）。

「霊感によって、わたしたちは、あらゆる知識、教養、そして芸術がありながら、なお悪徳に沈んでいたアテネの人々の生活において、神がご自分の僕を通して、どのように偶像礼拝と、誇り高い自己満足な人々の罪を譴責なさったかをかいま見ることができる。パウロの言葉はこのできごとの記念となり、教会に知識の宝を与えている。彼は誇り高い聴衆をいらだたせ、自らを問題に落とし込むようなことをたやすく語ることもできる立場にいた。彼の演説が彼らの神と自分の目の前にいる町の有力者たちを直接攻撃するものであったら、彼はソクラテスの運命に会う危険のうちにいたことであろう。しかし、彼は、彼らに真の神、すなわち彼らが礼拝しようと努力していたが、彼ら自身が公に刻んだ銘によって告白したとおり、彼らに知られていないお方を表すことによって、彼らの思いを注意ぶかく異教の神々からそらした。」（同上 97）

c. ほとんどすべての聴衆の反応とその結果を述べなさい（使徒行伝 17:32, 33）。例外だった二人の名を挙げなさい（使徒行伝 17:34）。

木曜日 *8月1日*

5. 知的な虚栄を遠ざける

a. アテネの人々はなぜパウロを理解することができなかったのですか（コリント第一 2:12–14）。イエスはこのことに関して、どのような原則を説明なさいましたか（ヨハネ 7:17）。

b. むかしのギリシャの価値観や哲学が今日の社会や教育制度でも広く行き渡っていますが、わたしたちは何を心に留めておかなければなりませんか（コリント第一 3:18–20; 8:1; エレミヤ 9:23, 24）。

「クリスチャンの知識は、将来の不死の命のための準備に関する一切のことにおいて、それ自身の測り知れない優位性の印を帯びている。それは、真理の尊い宝から受けてきた聖書の朗読者と信徒を、懐疑論者や異教の哲学を信じる者から区別する。

『こう記されている』という言葉にしっかりとついていなさい。危険であいまいな理論、すなわちもし抱いていれば思いをくびきにつなぎ、それにより人をキリストにある新しい被造物とすることのないものを思いから捨て去りなさい。思いは絶えず抑制され、守られなければならない。それは食物として宗教的な経験を強める食物のみが与えられなければならない。」（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1904 年 11 月 10 日）

人間の推論である哲学を研究してはならない。そうではなく、真理であられるお方の哲学を研究しなさい。これに比べたら、他の文学にはほとんど価値はない。

世俗的な思いは神のみ言葉を熟考することに喜びを見出さない。しかし、聖霊によって新しくされた思いにとっては、神聖なうるわしさと天の光が聖なる頁から輝いている。世俗的な思いにとっては荒涼とした荒野が、霊的な思いにとっては生ける流れの地となる。」（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1906 年 10 月 10 日）

金曜日 *8月2日*

個人的な復習問題

1. 人気のない真理を宣布するすべての人は、どのような悲しむべき結果を予期しなければなりませんか。
2. 高潔なベレヤの人々はどのように今日のわたしたちのための模範となるべきですか。
3. アテネの空論は、どのような方法でわたしたちの時代にも繰り返されていますか。
4. アテネの偶像礼拝者たちに話していたときのパウロの警告を説明しなさい。
5. 多神教がはびこっているこの時代において、何がわたしたちの保護手段となるべきですか。

コリント

「わたしは大きな患難と心の憂いの中から、多くの涙をもってあなたがたに書きおくった。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、あなたがたに対してあふれるばかりにいだいているわたしの愛を、知ってもらうためであった。」（コリント第二 2:4）

「パウロほど熱心で、精力的で、自己犠牲的なキリストの弟子であった者はかつて生存したことがなかった。……彼には滅びつつある人類に、救い主の愛を通しての真理の知識をもたらしたいとの燃える思いがあった。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 100, 101）

推奨文献： 患難から栄光へ上巻 262–275, 322–347

日曜日　*8月4日*

1.　宣教師である天幕作り

a.　主はパウロがコリントに到着したとき、どのような祝福を備えてくださいましたか（使徒行伝 18:1–3）。わたしたちはパウロの状況について何を悟るべきですか。

「〔パウロの〕彼の魂全体が、伝道の働きに携わっていた。しかし、彼は自ら貧困にあえいでいる諸教会の重荷となることがないように、つつましい労働によって自活した。彼は数多くの教会を建てたにもかかわらず、彼が利益のために福音を宣布しているとの疑いによってキリストの牧師としての自分の有用性と成功が損なわれることを恐れて、彼らによって援助されることを拒んだ。彼は敵に自分が誤解され、それによって自分のメッセージの力が減じるようなあらゆる機会を取り除いた。

福音における働き人として、パウロは自活する代わりに援助を受ける権利を主張することもできた。しかし、この権利を彼は進んで放棄した。体が弱かったにもかかわらず、彼は日中はキリストのみ事業に仕えるために働き、その後、夜の大部分を、そしてしばしば徹夜で、自分自身と他の人の必要に備えるために骨折ったのであった。使徒はクリスチャン伝道のための模範を残し、勤勉を高貴なものとし、尊重した。このように宣べ伝え、労しながら、彼は最高の種類のキリスト教を提示した。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 101）

2. 働きは広がる……

a. コリントにおいて、パウロは安息日ごとに会堂でだれを説得しましたか（使徒行伝 18:4, 5）。彼はそこで何を決心しましたか。またどのように主はご自分の僕をこの困難な時に励まされましたか（使徒行伝 18:6–11）。

b. パウロが次に直面した試練を述べなさい。そして、神は彼の働きをどのように祝福なさいましたか（使徒行伝 18:12–23）。

c. パウロとアクラとプリスキラの間にある相互の愛と敬意から、また神がこの三人ともご自分の栄光のためにお用いになることのできた方法から、何を学ぶことができますか（使徒行伝 18:24–28; コリント第一 3:22, 23; 4:6）。

「アクラとプリスキラは、〔アポロ〕の話を聞き、彼の教えが足りていないことを知った。彼にはキリストの使命、このお方の復活と昇天、また聖霊、すなわちこのお方がご自分の不在時にご自分の民と共にとどまらせるために遣わされた慰め主についての完全な知識がなかった。彼らはそこでアポロのために遣わし、教育を受けた演説者は彼らから感謝に満ちた驚きと喜びをもって教えを受けた。彼らの教えを通して、彼は聖書のより明確な理解を得、クリスチャン教会の最高の擁護者のひとりとなった。こうして知識の深い学者でありすぐれた説教者であった人は、天幕づくりというつつましい職業のクリスチャン男女の教えから、主の方法をより完全に学んだのである。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 119）

「アクラとプリスキラは 、その全時間を福音の宣教のためにささげるようには召されなかったが、これら身分の卑しい働き人たちは、アポロに真理をさらに完全に示すために、神に用いられたのである。主は、ご自分の目的を達成なさるために 、種々の器をお用いになる。そして、特別の才能をもった人々が、福音を教え、説教する働きにその全精力をささげるように選ばれる一方において、按手礼を受けていない他の多くの人々が、救霊の重要な務めを行うように召されているのである。

自給伝道者の前に広い働きの場が開かれている。多くの者は、時間の幾分かを何かの労働に携わりながら、伝道の尊い経験を得ることができる。そして、このような方法によって、助けを必要としている伝道地の重要な働きのための強力な働き人が養成されるのである。」（患難から栄光へ下巻 36, 37）

3. 焦点を失わない

a. 才能あるアポロがコリントにおける使徒として自分の忠実な働きを始めたとき、その都市の信徒たちの間では何が起こり始めましたか（コリント第一 1:10–13）。

b. 人間の学識や有限な知識の虚栄に関して、パウロはコリントの人々に、どの点を明らかにするよう迫られましたか（コリント第一 1:17–31）。

c. パウロは容易にコリントの聴衆に彼の広い学識を印象づけるような方法で語ることもできたにもかかわらず、アテネにおける彼の限られた成功は、どのように彼に影響を与え、代わりに違う方法を試すようになりましたか（コリント第一 2:1–5）。

「コリントで福音を宣べ伝えるにあたって、パウロは、アテネにおける働きを特徴づけたものとは異なった方法を取った。アテネにおいてパウロは、聴衆の性格に自分のやり方を適合させようとし、論理には論理で、科学には科学で、哲学には哲学で立ち向かった。彼は、このようにして過ごした時のことを考え、アテネにおける彼の教えがほとんど実を結ばなかったことに気づいて、コリントでは、また別の伝道方法によって、軽率で無関心な人々の心をとらえようと決めた。彼はむずかしい議論や討論をさけて、『イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは』、コリント人のあいだでは『何も知るまい』と決心した。彼は、『巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によ』ってコリント人を説こうとした（コリント第一 2:2, 4）。」（患難から栄光へ上巻 263）

「パウロは雄弁家であった。改心する前に、彼はしばしばほとばしる雄弁で聴衆に感銘を与えようとした。しかし今は、彼はこれをすべて放棄した。感覚を楽しませ、想像力を満足させはするが、しかし日常の生活には関係のないような、詩的表現や空想的描写にふけることなく、パウロはきわめて重要な真理を、人の心に刻みつけるために、単純な言葉を用いるよう努めた。真理を空想的に描写するなら、人を感動させることができるかもしれない。しかし、往々にして、このようにして示された真理は、信者を強めて人生の戦いに備えさせるに必要な糧を与えるものではない。」（同上 272）

4. 競争相手になることを拒否する

a. 神の使徒たちについて、コリントの人々は、どの原則を学ぶ必要がありましたか。またこれは今日わたしたちのあいだでもどのように適用することができますか（コリント第一 3:1–10）。どのように問題は賢明に対処されましたか（コリント第一 16:12）。

「教会において聖書の真理が受ける者を聖化していないという証拠として、彼らがある気に入った牧師に固着して、他の教師の働きを受け入れようとせず、彼らによって益を受けようとしないことほど強力なものはない。主はご自分の教会に、彼らが選ぶ通りではなく、彼らが必要としている通りに、助けを送られる。なぜなら、目先しか見えない死すべき人間は、何が自分たちにとって最高の益であるか識別できないからである。一人の牧師がどんな一つの教会をもキリスト教のあらゆる要求において完全にするために必要な資質をすべて持っていることはほとんどない。そこで神は、彼の後に他の牧師たちを次々と、他の人にはなかった何らかの資質を持っている一人びとりを遣わされる。

教会はこれらのキリストの僕たちを、あたかも主人なるお方その人を受け入れるかのように、感謝して受け入れるべきである。彼らは彼が神のみ言葉から自分たちに与えることのできる教えからできるかぎり恩恵を引き出すよう努めるべきである。しかし、牧師自身が偶像化されてはならない。人々の間に宗教的なお気に入りやひいきがあるべきではない。へりくだりの柔和さのうちに受け入れ、感謝されるべきなのは、彼らの伝える真理である。

使徒たちの時代に、キリストを信じると主張しながら、その使者たちにしかるべき敬意を払うことを拒んだ一派がいた。彼らは人間教師には従わない、福音の牧師の助けなしに、キリストから直接教えを受けると主張した。彼らは霊において独立心があり、教会の声に服することを承服しなかった。他の一派はパウロが自分たちの指導者だと主張し、彼とペテロのあいだで、後者にとって不利な比較を持ち出した。他の人々は、演説や雄弁の力においてアポロがパウロにはるかにまさると断言した。他の人々は、ペテロこそキリストが地上におられたときにこのお方と最も緊密な関係にあったと断言し、一方、パウロは自分たちの迫害者であったと主張した。この派閥の精神がクリスチャン教会を損なう危険があった。

パウロとアポロは完全に調和していた。後者は教会における分裂の原因に失望し、悲嘆にくれていた。彼は自分自身に示された優位性を利用することも、それを奨励することもなく、ただちに紛争の場から立ち去った。パウロが後に彼にコリントを訪問するように強く勧めたとき、彼は断り、ずいぶん後になって教会がよりよい霊的な状態になるまで、二度とそこで働かなかった。」（パウロの生涯からのスケッチ 127, 128）

木曜日 *8月8日*

5. 標準を掲げる

a. パウロは、生来、非常に肉欲に傾きがちなコリント人の良心に、どのような訴えをしましたか（コリント第一 3:16, 17; 6:13–20; 9:25–27）。

b. 何がしばしば熱心な改革の教師の経験となりますか（コリント第二 11:29, 30; 12:15）。奮闘しているコリント人は、自分の個人的な訪問からは必ずしもあまり益を受けることがないと感じて、パウロは何をしましたか（コリント第二 2:4; 8:16）。

「パウロは、信者たちを励ますためにテトスをコリントへ送ったとき、施しという善いわざにおいても教会を強化するように彼に指示を与えた。……初代教会は、おのれを忘れて惜しみなく施すことによって、大いなる喜びに満たされた。なぜなら信者たちは、自分たちの努力が、暗黒の中にいる人々に福音の言葉を伝えるのを助けていることを知っていたからである。彼らの物惜しみしない心は、彼らが神の恵みをむだに受けなかったことをあかししている。聖霊のきよめによる以外に、いったい何が、このような寛い心を生じさせることができようか。信者と未信者の目の前において、これは恵みの奇跡であった。

霊的繁栄は、クリスチャンの物惜しみしない心と密接につながっている。キリストの弟子たちは、その生活の中にあがない主の恵み深さをあらわすという特権を喜ばなければならない。」（患難から栄光へ下巻 24, 25）

c. パウロは福音の純潔さを維持しつつ、なおより広い地域へひろめていくことについて、テトスに何を教えましたか（テトス 1:5–9, 15, 16; 2:1, 11–15; 3:9–11）。

金曜日 *8月9日*

個人的な復習問題

1. **パウロは自分の生活のために手ずから働くすべての人をどのように鼓舞することができますか。**
2. **つつましいプリスキラとアクラはどのように遠くに及ぶ実を結ぶことができましたか。**
3. **知識人たちを勝ち得ようと努めるとき、わたしたちはコリントにおけるパウロから何を学ぶことができますか。**
4. **教会におけるさまざまな賜物の効果を損なうのは、どのような種類の態度ですか。**
5. **教会において、聖書的なふるまいの標準を掲げることが、なぜ命に関わるほど重要なのですか。**

ガラテヤとエペソ

「実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい。彼らが隠れて行っていることは、口にするだけでも恥ずかしい事である。しかし、光にさらされる時、すべてのものは、明らかになる。」（エペソ 5:11–13）

「善と悪は決して調和しない。光と闇の間に、妥協はありえない。真理は表わされた光であり、誤謬は闇である。」（天国で 260）

推奨文献： 患難から栄光へ上巻 304–321, 下巻 67–73

日曜日　*8 月 11 日*

1.　神のみ摂理のタイミング

a.　（使徒行伝の中で比較的少なく述べられている）どの地域がパウロの伝道旅行の範囲のうちに含まれていましたか（使徒行伝 16:6; 18:23）。

b.　パウロはどこへ行くことを禁じられましたか（使徒行伝 16:7）。何がこの地域に結果として成功があったことを示していますか。またこれはわたしたちに何を教えますか（ペテロ第一 1:1, 2）。

「真の働き人は、信仰によって歩み、働く。ときに彼らは善悪の力の戦いが激しくなるとき、働きの進展が遅いのを見て疲れてくる。しかし、もし彼らが衰えたり、くじけたりすることを拒むならば、彼らは雲を破って、救出の約束が成就するのを見るようになる。サタンが彼らを囲んでいた霧を通して、彼らは義の太陽の明るい光線の輝きを見るようになる。

信仰のうちに働き、結果を神にお委ねしなさい。信仰のうちに祈りなさい。そうすれば、このお方のみ摂理がその答えをもたらす。ときに、あなたは成功しないように見える。しかし、自分の努力に信仰と希望と勇気を入れて働き、信じなさい。あなたのできることをなした後、このお方の忠実さを宣言して主を待ち望みなさい。そうすればこの方はご自分のみ言葉を実現してくださる。いらだつ不安のうちにではなく、くじけない信仰と揺らがない信頼のうちに待ちなさい。」（教会への証 7 巻 245）

2. さまざまな思いを扱う

a. パウロは、どのような鋭い言葉をもって、ガラテヤ人の信徒のあいだにあった霊的に致命的な危機を真っ向から攻撃しましたか（ガラテヤ 1:6–9; 3:1–3; 4:9）。なぜ、パウロは彼らをコリントの人々とは違う方法で扱ったのですか。

「コリントの人々は誘惑に打ち負かされ、真理をよそおった誤謬を提示した教師たちの詭弁に欺かれたのであった。彼らは混乱し、惑わされてしまった。真理から偽りを識別することを彼らに教えるためには、彼らを教える者に、非常な注意と忍耐が要求された。厳しさや思慮の足りない性急さは、彼が益しようとしていた人々に及ぼす彼の感化力を破壊したことであろう。

ガラテヤの諸教会においては、誤りが、公然と、何の仮面もかぶらずに、福音の使命に取って代わりつつあった。信仰の真の土台であるキリストが、事実上捨て去られて、ユダヤ教の古い儀式がこれに代わった。使徒はもしこれらの教会が、彼らを脅かしている危険な感化力から救われるには、彼らに自分たちの真の状態を自覚させるために、最も断固とした手段が用いられ、最も鋭い警告が与えられなければならないことを見た。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 189, 190）

b. わたしたちが証し、他の人々を救い主に勝ち得たいと願うなら、どのような区別をはっきりと心に留めるべきですか（ユダ 21–23）。

「すべての真の教え方においては、個人的な要素がたいせつである。キリストは、人々に教えるときには、彼らを個人的に扱われた。キリストは個人的な接触と交際によって、十二弟子を教育なさった。キリストは最もとうとい教えを個人的にお与えになったが、聞く者がたったひとりしかいない場合もよくあった。オリブ山における夜の会合で、世人から尊敬されているラビに向かって、あるいはサマリヤの井戸のほとりで、世人から卑しめられている女に向かって、キリストは最もとうとい宝を示された。キリストはこの人たちの心と思いと精神がご自分の教えに向かって開かれ、感動し、受け入れることをお認めになった。幾度となくキリストのもとに押しよせた群集さえも、キリストにとっては無分別な人間共の集まりではなかった。キリストはひとりびとりに直接に語り、ひとりびとりの心に訴えられた。主は聴衆の顔をみつめ、真理が魂にふれた証拠としてその顔色が明るくなり、感応の気配がちらっとかすめるのをごらんになった。するとキリストのみ心はその喜びの共鳴にうちふるえるのであった。

キリストはひとりびとりの人間の中に、可能性をお認めになった。」（教育 273, 274）

3. 儀式か、変えられた心か?

a. すべての人は救われるために、何を悟らなければなりませんか(ガラテヤ 3:7–9, 27–29)。

「ガラテヤの諸教会においては、誤りが、公然と、何の仮面もかぶらずに、福音の使命に取って代わりつつあった。信仰の真の土台であるキリストが、事実上捨て去られて、ユダヤ教の古い儀式がこれに代わった。……

パウロは、ガラテヤびとを誤った道に導いた偽の指導者から離れて、神の是認の確かな証拠を持った信仰に立ち帰るように、彼らに勧告した。彼らを福音の信仰から引き離そうとした人々は、心が不潔で生活が腐敗した偽善者たちであった。彼らの宗教は、儀式の繰り返しであって、彼らは、それを行うことによって、神の恵みを得ようとしていた。彼らは、『だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない』ということばに服従を要求する福音を望まなかった(ヨハネ 3:3)。彼らは、そのような教理に基づく宗教は、あまりに大きな犠牲を要求すると感じ、自分たちの誤った道に執着して、自分を欺き、他の人々を欺いた。

宗教の外的形式を心と生活の清めに代用することは、これらのユダヤの教師たちの時代と同様に今でもなお、改心していない人々に歓迎されている。今日も当時と同様に、偽の霊的指導者がいて、多くの人々が、彼らの教えに熱心に耳を傾けている。サタンは巧妙に働いて、キリストを信じ神の律法を守ることによって与えられる救いの希望から、人々の心をそらそうとしている。大敵サタンは、各時代において、彼が欺こうとする相手の偏見や好みに、彼の誘惑を適合させる。彼は、使徒時代においては、ユダヤ人を、礼典律を尊重してキリストを拒否するように導いた。彼は現代においては、多くの自称クリスチャンたちに、キリストを尊ぶという口実の下に、道徳律を軽視させ、その戒めを犯しても罰はないと教えさせるのである。神のしもべは、信仰を曲解するこれらの人々に、しっかりした断固たる態度で立ち向かい、真理のことばによって、恐れることなく彼らの誤りを暴露しなければならない。」(患難から栄光へ下巻 69 ～ 71)

b. 多くの人々が今日儀式的な祭りの日を守ることに没頭しているため、わたしたちは何を覚えるべきですか(ガラテヤ 5:1, 2, 16–26)。

「ご自分の弟子たちに、彼らのまさに必要としていたこと、すなわち、彼らをこれまで彼らが重要不可欠なものとして携わってきたが、福音を受け入れることによってもはや何の効力もない礼典や儀式から彼らを解放する〔洗足〕式を残すことが、キリストの願いであった。これらの〔むかしのユダヤ教の〕儀式を続けることは、エホバへの侮辱となるのであった。」(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1898 年 6 月 14 日)

4. エペソにおける働き

a. パウロはなぜエペソにおいて、何人かの弟子に再バプテスマを施す必要があったのですか（使徒行伝 19:1–7）。なぜこれはふさわしいことだったのですか。

「〔エペソにおける12人のユダヤ人の兄弟たち〕がヨハネの手からバプテスマを受けたとき、彼らは深刻な誤謬を擁していた。しかし、より明白な光を受けて、彼らは喜んでキリストを自分たちの贖い主として受け入れた。そしてこの前進の一歩は彼らの義務において変化をもたらした。彼らはより純粋な信仰を受けたので、彼らの生活と品性に相応な変化があるのであった。この変化のしるしとして、またキリストを信じる彼らの信仰の認めとして、彼らはイエスのみ名において再バプテスマを受けた。

真心からキリストに従う多くの人々は、同様の経験を得てきた。神のみ旨をより明白に理解するとき、人は神との新しい関係のうちにおかれる。新しい義務が表わされる。かつては無邪気で、賞賛にさえ値すると思われた多くのことが、今や罪深いものに見える。」（パウロの生涯からのスケッチ132）

b. エペソにおけるパウロの任務を述べなさい（使徒行伝 19:8–10）。

「パウロが同郷の人々のために労している時に、パウロと共にまた彼を通して神の御霊が働いてこられた。真理をまじめに知りたいと望むすべての人を納得させるのに十分な証拠が提示されてきた。しかし、多くの人々は自らが偏見と不信に支配されることを許し、もっとも決定的な証拠を認めることを拒んだ。信徒たちの信仰が、これらの真理の反対者たちとの継続した交わりによって危険にさらされるのではないかと恐れて、パウロは弟子たちを区別された体として分け、自分自身は公での教えを続けた。……

パウロは『敵対する者も多』かったにもかかわらず、自分の前に『有力な働きの門が……大きく開かれ』ているのを見た。エペソはアジアの諸都市の中でも最も壮大であったばかりでなく、最も堕落していた。迷信と肉欲の楽しみがそのあふれるばかりの人口を支配していた。その偶像の神殿の陰で、あらゆる階級の犯罪が隠れ家を見出し、もっとも下劣な悪徳が繁茂した。

街は女神アルテミスの礼拝と魔術を行なうことで有名であった。ここにアルテミスの大きな神殿があり、そこは古代の人々に世界の不思議の一つと見なされていた。その広大な範囲とずば抜けた壮大さによって、街ばかりでなく、国家の誇りとなっていた。諸王や諸君主は、寄付によってそれを富ませた。……この豪華な建物に奉納された偶像は、粗末で無様な像で、伝説により空から落ちてきたと宣言されていた。」（同上134）

木曜日 *8月15日*

5. エペソでの挑戦

a. パウロの教えが、持ち運びのできる「アルテミス」像の製作者としての自分の財務事業を損なっているのを見て、銀細工人であるデメテリオは何をしましたか（使徒行伝 19:23–27）。人々はこの告発に、どのように反応しましたか（使徒行伝 19:28, 29）。

b. パウロはなお福音を提示するもう一度の機会を得るために、深刻な危険にも自ら直面しようとしていましたが、彼の兄弟たちは彼にどうするように強く勧めましたか（使徒行伝 19:30–32）。

c. 銅細工人のアレキサンデルは、どのような役割を果たしましたか。そして、なぜ使徒の働きに反対しようとした彼の試みは、失敗に終わったのですか（使徒行伝 19:33–41; テモテ第二 4:14）。

d. パウロはエペソにおける自分の働きをどのように要約しましたか（使徒行伝 20:17–21, 25–27, 33–35）。わたしたちは彼の最後の言葉の洞察力と続いた反応から、何を学ぶべきですか（使徒行伝 20:22–24, 28–32, 36–38）。

「真理への彼の忠誠によって、パウロは激しい憎しみを生じさせた。しかし、彼はまた最も深く、温かい愛情をも生じさせた。悲しみながら、弟子たちは船まで彼の後についてきた。彼らの心は彼の将来のためにも、自分たち自身のためにも不安でいっぱいであった。使徒の涙は、これらの兄弟たちと別れるときに、あふれ流れた。そして彼がそこに乗船した後、岸辺から泣き声が彼に届いた。長老たちは、これほどの深い関心を感じ、これほどの熱心さをもって自分たちや自分たちの見ている教会のために労してくれた彼からの助けをもはや期待できないことを知って、重い心で家路に着いた。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 202, 203）

金曜日 *8月16日*

個人的な復習問題

1. わたしたちはいつも神のみ摂理のタイミングについて、何を考慮すべきですか。
2. コリント人とガラテヤ人の異なった特徴を説明しなさい。
3. なぜ人々はこれほど儀式主義やユダヤ教化に陥りやすいのですか。
4. どのような方法において、エペソは今日のわたしたちの社会に似ていますか。
5. わたしたちはパウロがこの難しい伝道地を扱った方法から、何を学ぶことができますか。

危険に囲まれる

「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。」（エペソ 6:12）

「わたしたちには果たすべき兵士の義務、獲得すべき勝利がある。なぜなら、わたしたちはサタンの策略に無知であってはならないからである。わたしたちは祈り、それからサタンがわたしたちにこっそり近づき、わたしたちの祈りの必要性を忘れさせることがないように見張るのである。」（この日を神と共に 27）

推奨文献： 患難から栄光へ下巻 74–89

日曜日　*8 月 18 日*

1.　超自然的な行為を識別する

a.　キリストの奇跡のいくつかを思わせるパウロの不思議な医事伝道の行為を説明しなさい（使徒行伝 19:11, 12; マタイ 14:35, 36; ルカ 8:43–48）。

「使徒たちはいつも思いのままに奇跡を働くことができたわけではなかった。主はご自分の僕たちにこの特別な力を、ご自分のみ事業の進展もしくはご自分のみ名の誉れが必要とするときにお授けになった。……この機会に、衣が信じたすべての人のための治療の手段とされた。『その病気が除かれ、悪霊が出て行くのであった』。しかし、この奇跡は盲目的な迷信を奨励するものではなかった。イエスが苦しんでいる女が触れたことを感じられたとき、『力がわたしから出て行った』と叫ばれた。このように聖書は、主がパウロの手によって奇跡を行われたこと、またパウロの名ではなく、主イエスのみ名が大いなるものとされたことを宣言している。

使徒の働きに伴った超自然的な力の表れは、魔術にわたされて自ら見えざる存在との交信を誇っていた人々に深い印象を与えるよう意図されていた。パウロの奇跡は、エペソでかつて目撃されたものよりもはるかに力強く、詭弁師や魔術師の魔法の技術では真似のできない性質のものであった。こうして主はご自分の僕を、偶像礼拝者自身の評価においてさえ、最も人気と力のある魔術師にまさってはかりしれないほど高くされた。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 135, 136）

2. 古代と現代の魔術

a. キリストのみ名は、事実上魔術に傾倒していた背信のユダヤ人の恥辱に対して、どのように擁護されましたか（使徒行伝 19:13–16）。このできごとによって、多くの人々はどのような印象を受けましたか（使徒行伝 19:17, 18）。

b. 魔術を行なってきた新しい改宗者たちは、どのような手段を取りましたか（使徒行伝 19:19, 20）。それはなぜですか（マタイ 5:29, 30; エペソ 6:12）。

「キリストの変化させる恵みが心に及ぶと、罪人があまりにも長い間神の提供してくださっている偉大な救いをなおざりにしてきたために、義憤が魂を捕らえる。……彼は、エペソの人々のように魔術を責め、自分をサタンに結びつけていた最後の糸を断ち切るのである。彼は暗黒の君の旗印を去り、インマヌエルの君の血染めの旗印の下へ来る。彼は魔術書を焼くのである。」（ｴｰｽ・ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ 1893 年 11 月 16 日）

c. わたしたちは印刷物や多くのビデオ、DVD、ホームページについて、何を悟らなければなりませんか（伝道の書 12:12, 13; テモテ第一 6:20, 21）。

「作り話、すなわちだれかの想像の産物に時間を使うことは、思いをサタンの惑わしの力に明け渡すことである。そしてこの類の読み物は、道徳的な力を引き出すことのない作り話への不自然な食欲を作り出す。作り話は、ちょうどギルボアの丘に露も雨も欠乏していたように、思いと心を神の恵みに欠乏したまま放置する。神の子であると主張するすべての者は、魔法の書物を焼こうではないか。……

神を認めない者のペンから生じた書物は、神に仕える人々の書庫に場所を占めるべきではない。それらは思いの食物となるより、あなたのストーブを燃やす材料となるのにちょうど良い。神を認めない書物は多くの魂を滅ぼす原因となってきた。人はこれらのサタンの霊感の書物を研究し、何が真理であるかに関して混乱させられてきた。サタンは神を認めない書物を開く者の傍らに立って、そのような文学を求めるように思いを教育し、それから魂を非常に惑わせて、ほとんどその夢中な状態を打ち破ることができないほどにするのである。」（同上 1893 年 11 月 23 日）

「浪費や宗教心のない娯楽の場に踏み込もうとするすべての人、あるいは個人的な交わりや出版物という媒介を通して、好色者や懐疑論者、あるいは冒涜者の社会を求めるすべての人は、魔術に手を出しているのである。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 140）

3. ニューエイジ、オカルト、心霊術

a. 神の御目から見て、魔術はどれほど深刻な罪ですか（レビ記 20:6, 27; 申命記 18:9–12）。この古代の悪が、今日さまざまな名前や外観の下で実行されている方法を挙げなさい。

「大欺瞞者の代理者は、自分の目的を達成するためには何でも言い、何でもする。自分が心霊術者と呼ぼうが、『電気医師』、あるいは『磁気治療者』と呼ぼうがたいした問題ではないのである。見かけの良い仮面によって、彼は不注意な人の信頼を勝ち得る。彼は自分に助けを求める人々の生活の履歴を読み、彼らのあらゆる困難や苦悩を理解するふりをする。その心には、底知れぬ闇があるのに、光の天使に偽装して、彼は自分の勧告を求める女性に大変な関心を表す。彼は彼女たちに問題のすべては不幸な結婚のせいだと告げる。それは真実かもしれないが、そのような勧告は少しも彼らの状態をよくはしない。彼は彼女たちに愛と同情が必要だと告げる。彼女たちの幸福に非常に関心があるかのようにみせかけて、彼は疑わない自分の犠牲をすっかりとりこにし、ちょうどへびが震える小鳥をとりこにするように彼女たちをとりこにする。まもなく、彼女たちは完全に彼の支配に陥り、罪、恥辱、そして破滅が恐るべき結果である。わたしたちの唯一の安全は、いにしえの地境を守ることにある。」（健康に関する勧告 459）

「心霊術の信者たちは、古代の魔術を軽蔑して語るであろうが、大欺瞞者は、彼らが別の形の彼の策略に陥るのを、勝ち誇って喜ぶのである。

心霊術の霊媒の勧告を求めることを嫌悪する多くの人々が、さらに好ましい形態の心霊術に心をひかれているのである。他の人々は、クリスチャンサイエンスの教えや、神知学の神秘主義や、その他東洋の宗教にまどわされている。

ほとんどすべての種類の心霊術の主唱者たちは、いやしの力を持っていると主張する。彼らは、この能力を電気、磁気の力、いわゆる『共感治療』または、人間の心の中にある潜在力によるものであると言っている。」（国と指導者上巻 178, 179）

「このクリスチャン時代かつクリスチャン国家において、生ける神の力に信頼するよりも悪霊に訴える者が少なくない。母親は自分の子供の病床のかたわらで見守りながら叫ぶ。『わたしはこれ以上何もできない。わたしの子供を回復させる力のある医者はいないのでしょうか』。彼女はある千里眼者もしくは磁気治癒者によってなされた素晴らしい癒しについて教えられる。そして、彼女は自分の愛しい者を彼の保護にまかせ、あたかもサタンが自分のかたわらに立っているかのように、事実上その手のうちに置くのである。多くの場合、その子の将来の生涯は、打ち破るのが不可能に見えるサタンの力によって支配される。」（教会への証 5 巻 193, 194）

「信仰もしくは行いのうちに、知っている誤謬をいだくすべての人は、魔術の力の下にいる。」（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1882 年 5 月 18 日）

4. パウロ、エルサレムへ行く

a. パウロは、自分のユダヤ人の同胞の偏見を取り除くために、いつもエルサレムへ行くという目的を捨てられずにいましたが、彼の兄弟たちは彼になんと警告しましたか（使徒行伝 21:3, 4）。なぜそれでも彼は押し進んだのですか（使徒行伝 21:5; コリント第二 5:7）。

「聖霊は〔ツロのわずかな弟子たちに〕エルサレムでパウロを待ち受けている危険についてなにがしかを表された。そして彼らは何とかして彼の目的を思いとどまらせようと努力した。しかし、同じ聖霊が彼に苦悩とくびきと投獄を警告しながら、なお、自発的な捕虜として、前進するように強く迫った。」（パウロの生涯からのスケッチ 203）

b. カイザリヤにおいて、パウロにどのようなさらなる啓示がもたらされましたか。またなぜすべての人がパウロの心に触れる答えによってしずめられたのですか（使徒行伝 21:8–15）。キリストは殉教に関してわたしたちにどのような視点を与えておられますか（ルカ 12:4, 5）。

「使徒は、愛する兄弟たちからの嘆願によって深く心を動かされた。人間の判断によれば、彼は自分の計画を賢明でないとして放棄するだけの十分な理性をもっていた。しかし、彼は自分が神の御心への従順のうちに行動していることを感じていた。そして彼を、友人たちの声によって、あるいは預言者の警告によってさえ、思いとどまらせることはできなかった。彼は義務の道から右にも左にも曲がらないのであった。彼は、もし必要であれば牢獄へも死へも、キリストに従わなければならなかった。彼の涙は彼自身のためではなく、自分の決意が非常に深い悲しみをもたらした自分の兄弟たちに同情してこぼれた。」（同上 205）

c. パウロのエルサレム到着における結果を述べなさい（使徒行伝 21:17, 18）。

「パウロの一行は、異邦人の教会が、ユダヤの兄弟たちの中の貧しい人々を援助するためにおくった献金を、エルサレムの働きの指導者たちに正式に手渡した。パウロと同労者たちは多くの時間を費やし、精神的、肉体的労苦をなめながら、これらの献金を集めたのである。その額は、エルサレムの長老たちの期待をはるかに越えたものであったが、これは、異邦の信者たちの多くの犠牲と、彼らの耐えた厳しい窮乏生活をあらわしたものであった。……

パウロと彼の仲間たちは、今、彼らが面会している人々の中にさえ、この贈り物の動機となった兄弟愛の精神を理解することができない人々があるのを、明らかに知った。」（患難から栄光へ下巻 84）

木曜日 *8月22日*

5.　危険の中におかれる

a.　エルサレムにいる長老たちによって、突然パウロに明らかにされた賢明でない不要な計画と、その背後にある人間の論理を説明しなさい（使徒行伝 21:19–25）。

「兄弟たちは、パウロが勧告された行動をとって、彼についての偽りのうわさに対して明確に反論することを望んだ。彼らは、異邦人の信者と礼典律に関する前回の会議の決議が、なお有効であると彼に言明した。しかし、彼らの勧告は、その決議と一致していなかった。この指示は、神の霊によって与えられたものではなかった。それは、臆病の結果であった。」（同上 89）

b.　この計画について、パウロはどうしましたか（使徒行伝 21:26）。なぜ、パウロはこのような行為を実行することに同意したのですか（コリント第一 9:22, 23）。

「パウロは、エルサレム教会の指導者たちが彼に対して偏見を持ちつづけるかぎり、彼らは常に彼の働きに対して反対することを悟った。彼は、ここでなんらかの穏当な譲歩によって、彼らを真理に導くことができれば、他の場所での福音の働きを成功させるための、大きな障害物を取り除くことになると感じた。しかし、パウロは、彼らが要求したほどに譲歩する権利を神から授けられてはいなかった。

兄弟たちと調和したいというパウロの大きな願い、信仰の弱い者に対する彼の思いやり、キリストと共にいた使徒たち、特に主の兄弟ヤコブに対する彼の尊敬、また、できるだけ原則を曲げずにすべての人に対しては、すべての人のようになるという彼の決心などをみな考慮するときに、彼が、これまで歩んできた堅固で明確な道からやむを得ずそれたとしても、大して驚くに当たらない。」（同上 90）

金曜日 *8月23日*

個人的な復習問題

1.　神はどのような種類の状況下で、ただならぬ奇跡を行ってこられましたか。
2.　ただちに焼く必要のある「魔術の本」とは何ですか。
3.　わたしたちは、どのような形の心霊術に落ちる餌食になる危険がありますか。
4.　パウロはなぜエルサレムへ行ったのですか。
5.　エルサレムにおけるパウロの論法から、わたしたちはどのような警告を心に留めるべきですか。

真理のための囚人

「わが敵よ、わたしについて喜ぶな。たといわたしが倒れるとも起きあがる。たといわたしが暗やみの中にすわるとも、主はわが光となられる。」（ミカ 7:8）

「もしあなたが天の真理を垣間見たなら、顔をそむけてはならない。天の光景に対して不従順となってはならない。あなたの受けた光のうちを歩みなさい。そうすれば、あなたの道はますます明るくなっていく。カルバリーから輝いている光のうちに、あなたは罪の罪深さを知り、またあなたは罪から救おうとする神のみこころと力を知るようになる。」（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1903 年 5 月 27 日）

推奨文献： 患難から栄光へ下巻 90–104

日曜日　*8 月 25 日*

1.　自分の主人のように苦しむ

a.　国際的に有名なキリストのための擁護者として、エルサレムにて崇拝されている宮の内庭に入ることによって、パウロは自らをどのような危険にさらしましたか（使徒行伝 21:27, 28）。

「このような行動をとるようにパウロに勧告した人々は、彼がどのように大きな危機にさらされるかを十分に自覚していなかった。この時、エルサレムには、各地からの礼拝者があふれていた。パウロは、神から与えられた任命に従って、異邦人に福音を伝え、世界の多くの大都会を訪れていた。そして彼は、祭に参列するために外国からエルサレムに来ていた幾千の人々に、よく知られていた。このような人々の中には、パウロに対して激しい憎しみを抱いていた者があった。彼が、公の祭の時に、神殿に入ることは、生命を危険にさらすことであった。」（患難から栄光へ下巻 91）

b.　ユダヤ人たちは、パウロを乱暴に宮の外へ引きずり出しながら、どのような偽りの告発をパウロにつきつけましたか（使徒行伝 21:29）。

c.　続いた混乱状態の騒動を述べなさい（使徒行伝 21:30–36）。この光景全体は、わたしたちに何を思い起こさせますか（マルコ 15:12–14）。

2. 守られる神の僕

a. パウロは（ギリシャ語で）自分を拘束して縛っている人に何を要請しましたか（使徒行伝 21:37）。パウロを悪く考えた千卒長はだれでしたか。またなぜ彼はパウロの次の要求をかなえたのですか（使徒行伝 21:38–40）。わたしたちはパウロがいつも求めていた種類の機会から、何を学ぶことができますか（テモテ第二 4:2）。

「選択によって、世と混じってはならない。しかし、あなたに警告の言葉、招きの言葉、嘆願の言葉があれば、それを語ることを恐れてはならない。キリストのために証する機会を失ってはならない。このお方はあらゆる恵みの源であられ、ご自分のために貴重な金の油を送り、彼らがご自分のためにはばかることなく証できるようにして下さる。わたしたちが神に献身するとき、聖霊はわたしたちのランプが明るく照らし続けることができるように、聖なる油を与えて下さる。」（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1899年5月16日）

b. なぜパウロがヘブル語で発言しはじめると、彼の話を聞いていたユダヤ人の多くは比較的よくそれを受け入れたのですか（使徒行伝 22:1–5）。なぜ、パウロは自分の証をある程度、ユダヤ人がそれ以上耐えられなくなるところまで続けることができたのですか（使徒行伝 22:6–22）。

「もしも彼が、反対者たちと議論しようとしたならば、彼らは彼の言葉を聞くことを頑強に拒んだことであろう。しかし、彼自身の経験の物語は、説得力があって、しばし彼らの心を和らげ、静めるように思われた。

それから彼は、彼の異邦人の間の働きが、彼の選択によるものでなかったことを示そうと努めた。彼は、彼自身の同胞のために働くことを願っていた。しかし、神の声が、その神殿の中で聖なる幻のうちに彼に語り、「あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ」と指示したのである（使徒行伝 22:21）。

人々は、ここまでは、注意深く耳を傾けていたが、パウロが、異邦人へのキリストの使者として自分が任命を受けた時のことに言及したとき、彼らは、またもや憤激した。彼らは、自分たちだけが、神の恵みを受けた民族であると思い込んでいたので、これまで独占的に自分たちのものであると考えていた特権を、軽蔑している異邦人に分け与えることを好まなかった。」（患難から栄光へ下巻 95）

3. サンヒドリンの前で

a. ヘブル人を理解することができずに、千卒長は自分の囚人に対して、ただ彼に対する暴徒の怒りに基づいて、どのような行動をとりましたか（使徒行伝 22:23, 24）。パウロはどのように静かに彼の上に課されようとしていた拷問の準備を回避しましたか。また彼のためにどのような計画が整えられましたか（使徒行伝 22:25–30）。

b. パウロがユダヤ人議会の前でしかるべき証をすることが許されるという機会は、どのように強力なものでしたか（使徒行伝 23:1–5）。無益な状況を悟って、パウロはどのような洞察力のある手段をとりましたか。またなぜ神は、ご自分の僕を守るために異教の役人をお用いにならなければならなかったのですか（使徒行伝 23:6–10）。この経験は何を思い出させますか。

「サタンは世から神の光をしめ出すことに力を尽し、救い主を滅ぼすためにあらゆる悪知恵を用いた。しかしまどろむ ことも眠ることもなさらない神は、いとし子イエスを見守っておられた。イスラエルのために天からマナをふらせ、飢饉（ききん）の時にエリヤを養われた神は、マリヤとみ子イエスのために異教の土地に避難所をお備えになった。」（各時代の希望上巻 56）

c. パウロ自身の言葉で説明された彼の試練を考えるとき、わたしたちはどのような展望を持つ必要がありますか（コリント第二 4:17, 18）。

「この生涯は、よくてもクリスチャンの冬と冬の冷たい風にすぎない。すなわち失望、損失、痛み、そして苦悩がここでのわたしたちの分である。しかし、わたしたちの希望は前方のクリスチャンの夏、すなわち、わたしたちが気候を変え、あらゆる冬の突風や激しい嵐を後にし、イエスがご自分を愛する人々のために用意しに行かれた住まいにつれていかれるときへ及んでいる。……

わたしたちが自分たちの状況を使徒パウロの状況と対比するとき、少しでもつぶやきや文句の気持ちをいだいていることに対して譴責を感じるべきである。わたしたちは経験によって自己否定、迫害、そしてキリストのための痛みをほとんど知らない。わたしたちはここに執行猶予中の者としているのであって、テストされ、試されなければならないのである。」（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1878 年 11 月 7 日）

4. 闇の中の光

a. パウロがその夜、自分の同郷の人々に辱められ、自分の救い主のために激しく迫害されてただ一人であったとき、神はどのように彼を覚えておられましたか（使徒行伝 23:11）。

「パウロは、〔パリサイ人とサドカイ人と会衆が相分れた〕この日の苦い経験を思い返して、自分の行動は、神に喜ばれるものではなかったのではないかと考え始めた。結局、エルサレムの訪問は、間違いだったのであろうか。彼が、兄弟たちと団結することを熱望したことが、このような不幸な結果を招いたのであろうか。

パウロは、神の民と称するユダヤ人が不信の世界の前に示す態度に、深く心を痛めた。異教の将校たちは、彼らをどのように見ることであろう。彼らは、主の礼拝者であると称し、聖職にあるにもかかわらず、盲目的で不合理な怒りをほしいままにし、信仰において意見の異なる兄弟たちさえ殺そうとした。そして、彼らの最も厳粛な議会を、紛争と混乱の場所にしてしまった。パウロは、神の名が、異教徒の前で屈辱をこうむったことを感じた。

今や、彼は、捕らわれの身となった。そして彼は、敵たちが、悪意の限りをつくして、彼を殺そうとしているのを知っていた。教会のための彼の働きはもうこれで終わり、今、狂暴なおおかみがはいり込んでくるのであろうか。パウロにとって、キリストのみわざは、重大な関心事であった。そして彼は、各地の教会の当面する危機について憂慮した。彼らは、パウロがサンヒドリンの議会において当面したのと同じような人々の迫害に会わなければならなかった。彼は、苦悶と失望のあまり、泣いて祈った。

主はこの暗黒の時に、ご自分のしもべをお忘れにならなかった。主は神殿の庭で、彼を暴徒の手から守られた。主は、サンヒドリンの議会において、彼と共におられた。主は、兵営において、彼と共におられた。そして、主は、導きを求めるパウロの熱心な祈りに答えて、ご自身を忠実なしもべにあらわされた。『その夜、主がパウロに臨んで言われた、「しっかりせよ。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなくてはならない」』（使徒行伝 23:11）。」（患難から栄光へ下巻 98, 99）

b. パウロはこのとき何を悟ることができましたか（詩篇 63:5–9; 申命記 31:6）。

木曜日 *8月29日*

5. 試練のただ中における光線

a. パウロの苦しんだ困難かつ困惑させる状況と同様の状況に、わたしたちがいることがわかるとき、各時代を通じて、どの賢明な原則と約束がこだましていますか(ミカ 7:7, 8; コリント第二 4:8–10)。

「教会の指導者たちが、パウロに対する苦い感情をことごとく捨て去って、異邦人に福音を伝えるために神の特別の召しを受けた者として彼を受け入れていたならば、主は、パウロを彼らに残しておかれたことであろう。神は、パウロの働きがこのように速やかに終わるようには定めておられなかった。しかし神は、エルサレム教会の指導者たちがひき起こした一連の事件を挫折させるために奇跡を行われはしなかった。」(同上 103)

b. パウロが牢獄にいたとき、どのような奇妙な誓いがなされましたか。またどのような手段によって、神は何が起こっているかを千卒長に知らせ、またパウロのために行動をとるよう備えをなさいましたか (使徒行伝 23:12–30)。主はこのような断食をどのようにご覧になりますか (イザヤ 58:2–5)。

c. 兵士たちはパウロに何をしましたか。そして総督は何を決心しましたか (使徒行伝 23:31–35)。キリストはどのようにこのことがご自分に従う者たちに起こることを預言なさいましたか。またなぜパウロはこの試練を特権として見ることができたのですか (ルカ 21:12; 詩篇 119:46; 箴言 22:29)。

金曜日 *8月30日*

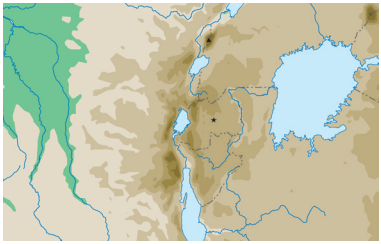
個人的な復習問題

1. **わたしたちは宮でパウロのいた種類の状況を、どのように避けることができますか。**
2. **この危機において、何がパウロの最高の優先事項でしたか。**
3. **使徒はこの大いなる試練のただ中で自分の前途をどのように述べていますか。**
4. **その夜、キリストはご自分の悩みのうちにいるしもべに、どのようにご自分の憐れみを降り注がれましたか。**
5. **わたしたちはパウロの経験のこの章から、どのような原則を学ぶことができますか。**

安息日 2013 年 9 月 7 日

第一安息日献金

ルワンダ・キガリの礼拝堂と本部のために



ルワンダは中央アフリカの小さい国です。26,338 平方キロメートルの面積をもち、ウガンダ、タンザニア、ブルンジ、そしてコンゴ共和国（DRC）に接しています。人口はローマ・カトリック（56.5%）、プロテスタント（37.1%）、そのうち 11.1% がセブンスデー・アドベンチスト、イスラム教(4.6%)、そしてどの宗教にも加入していない人（1.8%）からなっています。

1894 年のドイツによるこの国の広範囲にわたる探索により、ヨーロッパの感化が始まりました。ドイツは領土に広く行きわたっていたツチ族を含む当時の社会構造を支持しました。第一次世界大戦後、ルワンダはもっと直接的にベルギーによって植民地化されました。ドイツとベルギーは両方とも、フツ族とツチ族を階級というよりは違う民族だと考えて、ツチ族の至上権を促進しました。この政策は混乱へと導き、最終的にツチ族に対する暴動となりました。1962 年のルワンダの独立後、長年にわたり暴力のくりかえしが 1990 年の内戦となり、1994 年には百万人以上のツチ族と穏健派フツ族の大虐殺という結果になりました。2,000,000 万人の難民が、ほとんどコンゴ共和国へ逃げました。

このような不安定な出来事にもかかわらず、改革のメッセージは、神の栄光のために、ルワンダに 2003 年に届きました。ルワンダからの宣教師たちは、喜んで福音のメッセージを、ブルンジ、ウガンダ、またコンゴ共和国の南北両方のキブ地方などの近隣諸国に広めました。今日、ルワンダにおける教会員は 1,017 人へと成長し、ルワンダの首都であるキガリには 70 人を越える信徒がいます。1994 年の大虐殺のために、教会には数多くのやもめや孤児がいます。キガリでは、礼拝を行うための礼拝堂がありません。時折、礼拝に適切な場所を見つけることが困難で、信徒たちは安息日に自分の家庭で礼拝しています。このような状況にありますが、わたしたちはオーストラリアとアメリカ合衆国の兄弟姉妹が神のみ事業を進展させるためにわたしたちを助けて下さったことに感謝しています。

いま、わたしたちはキガリに礼拝堂と本部を建設したいと願っています。そこで、世界中の兄弟姉妹の皆さんへこのプロジェクトを可能とするために惜しみない献金を分かち合うようお願いします。この訴えに惜しみなく応えてくださる皆さんに感謝します。皆さんの捧げものは、この国のすべての信徒にとってすばらしい香りとなります。

ルワンダの皆さんの兄弟姉妹より

カイザリヤにおける裁判で

「わたしはまた、神に対しまた人に対して、良心を責められることのないように、常に努めています。」（使徒行伝 24:16）

「み言葉の真理を確認するために遣わされた神の使命者の一人として、〔パウロは〕何が真理であるかを知っていた。そして聖化された良心の大胆さをもって、彼はこの知識を誇りとした。」（ﾊﾞｲﾌﾞﾙ・ｺﾒﾝﾀﾘ [E.G. ﾎﾜｲﾄｺﾒﾝﾄ]6 巻 1094）

推奨文献： 患難から栄光へ下巻 105–128

日曜日　*9月1日*

1.　ペリクスの前に引き出される

a.　パウロの告発者はだれでしたか。また、どのように彼は告発を得るために、へつらいの言葉をもって偽りましたか（使徒行伝 24:1–9）。

b.　詩篇記者は、へつらう者の方法をどのように要約しましたか（詩篇 5:8, 9）。

c.　対照的に、パウロの弁明を特徴づけていたものは何でしたか。またこれはパウロの群れに向けた彼自身の勧告をどのように反映していましたか（使徒行伝 24:10–21; ローマ 12:17, 18）。

「ペリクスは、パウロを告発する人々の性質と品性とを読み取る十分な洞察力を持っていた。ペリクスは、〔ユダヤ人と彼らの弁護人テルトロ〕が何の目的で彼にへつらったかを知った。そして彼はまた、彼らがパウロに対する告発の十分な証拠を提出し得ないことをも見た。彼は被告に向かって、自己の弁明をするように合図した。パウロは、儀礼的なむだな言葉を言わないで、簡単に、ペリクスの前で自分を弁護できることを非常にうれしく思うと言った。それは、ペリクスが、長年にわたって総督を勤め、ユダヤ人の律法と習慣をよく理解していたからである。パウロは、彼に対する告発が、一つとして真実のものではないことを明らかに示した。」（患難から栄光へ下巻 106, 107）

2. 救われるための機会

a. パウロの証に基づいて、ペリクス総督は何を識別し、決定することができましたか（使徒行伝 24:22, 23）。

b. 聖霊はどのように、ペリクスと彼の二番目の妻ドルシラの心に、さらに深い霊的な関心を引き起こしましたか（使徒行伝 24:24）。

「〔ペリクスの〕品性に汚点をつけていた抑制のきかない放縦の一例が、その頃達成したドルシラとの結婚に見られた。放蕩な魔術師である占星術師シモンの欺瞞的な策謀によって、ペリクスはこの王女が自分の夫を離れて自分の妻になると信じるようになった。ドルシラは若くて美しく、なによりもユダヤ人であった。彼女は自分の手を取るために多大な犠牲を払った自分の夫に献身的に結びついていた。実に彼女の最も強い偏見に先行し、残酷で高齢な放蕩者との姦淫の関係を築くために、自分の国家の嫌悪の対象を自らの身に負うように誘うものはほとんどなかった。しかしなお、魔術師にして裏切り者の悪魔的な策略は成功し、ペリクスは自分の目的を果たした。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 235, 236）

c. わたしたちはペリクスとドルシラを熱心に求めておられた神を見ることによって、何を考慮すべきですか（ペテロ第二 3:9）。

「非常に多くの者がサタンの誘惑に欺かれて、自分たちの特権を乱用し、救い主の愛に満ちた自分たちへの関心を認めず拒むことによって、救い主をなんと侮辱することであろう。」（上を仰いで 244）

「わが兄弟、わが姉妹よ、イエスはあなたがたが生けるぶどうの木の枝となるよう招いておられる。このお方はご自分とつながるようにあなたを召しておられる。それはご自分の力のうちにあなたがご自分の戒めを行うことができるためである。あなたはこのお方から自らを切り離そうとしてきた。しかし、あなたは成功しなかった。神はあなたを愛しておられ、あなたがご自分の足もとに座し、ご自分から学んでほしいと思っておられる。このお方の許し、同情、寛容がキリストのうちに世に表されている。もしキリストがわたしたちの魂のために贖い代を払っておられなかったならば、わたしたちには神の戒めに従順な品性を発達させる恩恵期間はなかったのである。であれば、強情と不信によってキリストを失望させてはならない。人への神の賜物を感謝しなさい。あなたが自分の恩恵期間の意味を理解していることを示しなさい。それはわたしたち一人びとりにとって命か死を意味している。わたしたちは日ごとのふるまいによって、自分たちの永遠の運命を決定しているのである。」（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1897 年 1 月 26 日）

3. 総督に証言する

a. パウロは放蕩の夫婦であるペリクスとドルシラにどのような必要とされているメッセージを伝えましたか。彼らはどのように答えましたか（使徒行伝 24:25; 伝道の書 11:9）。

「パウロは〔ペリクスとドルシラとの個人的な面談〕を神の賜った機会だとみなした。そして彼は忠実にそれを生かした。彼は自分の前にいる男女が、自分を死に処するか、あるいは自分の命を生かしておく権威をもっていることを知っていた。しかし、彼は彼らに称賛やへつらいを語らなかった。彼は自分の言葉が彼らにとって命のかおりか、死のかおりとなることを知っていた。そしてまったく利己的な配慮を忘れて、彼は彼らが自分たちの魂の危険に目覚めるように努めた。

福音のメッセージは中立を認めない。すべての人を明らかに真理のためか、あるいはそれに反対するものとみなす。もし彼らがその教えを受け入れず従わないならば、彼らはその敵なのである。しかし、それは人や階級や状態を偏り見ない。」（パウロの生涯からのスケッチ 240）

パウロは、熱誠こめて真心から語ったので、彼の言葉には、人々を感動させる力があった。クラウデオ・ルシヤは、彼のペリクスへの手紙の中で、パウロの行動に関して同様の証言をしている。……ペリクスは、私利私欲以上の高尚な動機を知らず、賞賛を愛する心と昇進を欲する心に支配されていた。彼は、ユダヤ人を怒らせることを恐れたので、パウロに罪がないと知りつつも、彼を全面的に釈放することを差しひかえた。」（患難から栄光へ下巻 108）

b. 総督のパウロへの関心はどのように限られていましたか。またなぜ使徒はペリクスの釈放の申し出を拒んだのですか（使徒行伝 24:26, 27; イザヤ 33:14–16）。

「その後、二年の間、パウロに対して何の処置も取られなかったが、しかし彼は、監禁されたままであった。ペリクスは、幾度か彼を訪れ、彼の話に熱心に耳を傾けた。しかし、彼の、一見友好的な態度の真の動機は、利益を得たいからであった。そして彼は、多額の金を支払えば釈放されることができると、ほのめかすのであった。しかし、パウロは、高貴な品性の持ち主であったので、わいろを使って自由を得ることは、とうていできなかった。彼は、何の犯罪も犯していなかったのであるから、自由を得るためにあえて悪を犯そうと思わなかった。さらに、彼は、身代金を支払いたいと考えたとしても、貧しくて彼自身はとても払えなかった。そして、自分のために、信者たちの同情と寛大さに訴えたくはなかった。また彼は、自分が神の手の中にあるという自覚を持っていた。だから、自分に対する神のみこころに介入したくなかったのである。」（同上 114）

4. 王の前に引き出される

a. ユダヤ人たちは新しい総督ポルシウス・フェストにどのような申し出をしましたか。またその結果は何でしたか（使徒行伝 25:1–12）。フェストとアグリッパの間の会話を述べなさい（使徒行伝 25:13–22）。

b. わたしたちは自分の前にある機会を最高に生かそうとするパウロの試みから何を学ぶべきですか（使徒行伝 26:1–23）。

「自分の来賓に敬意を表して、フェストはこれを人目を引く見世物の機会としようとした。代官や来賓の裕福な衣服、兵士たちの剣、そして彼らの司令官たちのきらめく武具は、その光景に輝きを加えた。

そしていまパウロは縛られたままで、一堂に会した人々の前に立った。ここになんという対比が示されたことであろう！アグリッパとベルニケは権威と地位をもっていた。そしてそれゆえに彼らは世から恩寵を受けていた。しかし、彼らは神が評価される品性の特質には欠けていた。彼らは神の律法の違反者であり、心と生活が堕落していた。彼らの一連の行動は、天に忌み嫌われるものであった。

老齢の囚人は、護衛に縛られて、一見世が敬意を表するようなものは何もないように見えた。しかしなお、友人も富も地位もないように見え、また神の御子を信じる自分の信仰のゆえに囚人としてとらえられているこの人のうちに、全天は関心をもっていた。御使たちが彼に随行していた。これらの輝く使者の一人の栄光がひらめき出たなら、尊大にして誇りたかい王家の人々は青ざめて、王や延臣たちは、キリストの墓でのローマの護衛のように、地に倒れてしまったことであろう。……

使徒はまばゆい見せびらかしや自分の聴衆の高い地位にうろたえることはなかった。なぜなら、彼は世の富や地位がどれほど価値のないものであるかを知っていたからである。地上の尊大さや権力は、一瞬たりとも、彼の勇気をひるませたり、あるいは彼の自制心を失わせたりすることはできなかった。」（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1911 年 11 月 16 日）

「人がどこでどのような働きに召され、神に代わって語るようになるかは、だれにもわからないのである。人が将来どのよう になるかを知っているのは、ただ、わたしたちの天の父だけである。わたしたちの弱い信仰では認めることのできない可能性が、わたしたちの前途にはある。そこで、わたしたちは、知性が訓練され、必要ならば、この地上の最高の権威者の前に立って、みことばの真理を明らかにし、神のみ名の栄光を輝かすようにしなければならない。神のために働くために、知的な準備をする機会は、一つでも見のがしてはならない。」（キリストの実物教訓 308）

木曜日　9月5日

5. カイザルへの訴え

a.　アグリッパの反応は、フェストの反応と、どのように異なりましたか（使徒行伝 26:24–28）。

「公平に評すれば、フェストやアグリッパやベルニケが、使徒を拘束している鎖をつけていてもよかったであろう。みんなは重罪を犯していた。これらの犯罪者たちは、その日、キリストのみ名による救いが与えられていることを聞いていた。少なくとも一人は、提供されているその恵みとゆるしをほとんど受け入れる気持ちになっていた。しかしアグリッパは提供された恵みをしりぞけ、はりつけにされたあがない主の十字架を拒んだのである。」（患難から栄光へ下巻 127, 128）

b.　面談はどのようにまとまりましたか（使徒行伝 26:29–32）。どのような意味において、異教の支配者たちの前でのこの証は、パウロや他の神の僕たちが直面した他の試練よりも軽い患難でしたか（エゼキエル 2:3–7; エレミヤ 1:17）。

c.　ペリクスの最終的な結末を述べなさい。

「〔大胆な不正や残酷さの行為のゆえに〕、ユダヤ人はペリクスに対して正式な苦情を申し立て、彼は自分の嫌疑に答弁するためにローマに召喚された。彼は自分の強奪や圧政の行動が彼らに十分な苦情の素地を与えたことをよく承知していたが、なお彼らをなだめる希望をもっていた。そこで、彼はパウロに真心からの敬意を払っていたにもかかわらず、彼を囚人としておくことによって彼らの悪意を満足させようと決心した。しかし、彼のすべての努力は無駄になった。彼は刑罰や死はまぬかれたが、職務からははずされて、悪行によって富の大部分をはく奪された。彼の罪の共労者であるドルシラは、後に彼らの一人息子と一緒にベスビオ山の噴火で命が断たれた。彼自身の日々は恥辱のうちに人知れず終わった。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 246）

金曜日　9月6日

個人的な復習問題

1. **権威に対する敬意とへつらいの相違を説明しなさい。**
2. **わたしたちはペリクスへのパウロの訴えを歓迎しないものとしたわなをどのように避けることができますか。**
3. **なぜペリクスはパウロをあのように―好意的にも不利にも―扱ったのですか。**
4. **神がアグリッパ王とパウロの相違をどのようにご覧になったか述べなさい。**
5. **わたしたちは、どのようにペリクスとアグリッパの過ちを繰り返す危険がありますか。**

ローマへの航海

「昨夜、わたしが仕え、また拝んでいる神からの御使が、わたしのそばに立って言った、『パウロよ、恐れるな。あなたは必ずカイザルの前に立たなければならない。たしかに神は、あなたと同船の者を、ことごとくあなたに賜わっている』。」(使徒行伝 27:23, 24)

「パウロは天の雰囲気をたずさえていた。彼と交わる人はみな彼がキリストと結合している感化力を感じた。」(キリストを映して 360)

推奨文献： 患難から栄光へ下巻 129-137

日曜日　*9月8日*

1.　繰り返される歴史

a.　どのようにパウロの経験は、まもなく繰り返されることになりますか (マタイ 10:31–33)。

「ふたたび、ユダヤ人の偏狭と自己義から生まれた憎しみが、神の僕を保護のために異教の統治者〔カイザル〕へ向かうよう駆り立てた。……この時代に神の民がこれから直面しなければならないのはこの同じ精神である。彼らがまもなく通らなければならない大危機において、彼らはパウロの経験をよりよく知るようになる。キリストに従うと公言する人々の間に、ユダヤ国家に存在していたのと同じ誇り、形式主義、虚栄、利己心、そして抑圧がある。闘いが終わり、勝利をかちとる前に、わたしたちは民としてパウロの試練と同様の試練を経験をしなければならない。わたしたちは同じ心の頑なさと同じ残酷な決意、同じ頑固な憎しみに直面するのである。

キリストの代表者だと公言する人々が、パウロの取り扱いにおいて祭司や役人たちのとったのと同じ行動をとるようになる。自分自身の良心の指図に従って恐れることなく神に従おうとするすべての人は、その悪の日に耐えるために、道徳的な勇気、堅固さ、そして神とそのみ言葉の知識 を必要とする。……

神はご自分の民がまもなく来ようとしている危機のために準備ができることを望んでおられる。準備していても準備していなくても、わたしたちはみなそれに直面しなければならない。ただ品性が神聖な標準に見合うように徹底的に律せられている人々だけが、テストの時に固く立つことができるのである。」(ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 250 ～ 252)

2. 使徒：価値ある資産

a. アグリッパの前での使徒の証を聞き、その手に使徒がつながれていた百卒長ユリアスから、パウロはどのような恩寵を受けましたか（使徒行伝 27:1–3）。

「通常の旅行者にとって困難かつ危険となる旅は、囚人としての使徒にとって二倍つらいものとなるのであった。ローマの兵卒は自分の囚人たちの安全のために自分自身の命をかけて責任をもっていた。そしてこのために、兵士が順番で自分の左手首に囚人の右手首を鎖でつなぐのが習慣であった。これにより、使徒は自由に動くことができなかったばかりでなく、最も性分が合わず、ひどく不快な品性の人々とすぐ近くにつねにくっついていることになった。彼らは無教育で精錬されていないばかりでなく、その環境の不道徳な感化によって、残忍で低俗になっていた人々であった。しかしながら、この習慣は囚人が上陸している時より、船上にいる時の方がいくぶん厳しさを減じて守られていた。ある状況が、彼の分の困難を大いに軽くした。彼は自分の兄弟たち、ルカやアリスタルコの同行を楽しむことが許されたのである。コロサイ人へ宛てた彼の手紙の中で、彼は後者について、彼と『一緒に捕われの身』となっていると語っている。しかし、アリスタルコがパウロのくびきを共にし、彼の患難の中で彼に仕えたのは、彼への愛情ゆえに選択した行為としてであった。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 262）

b. 今やユダヤ人の安全な航海の季節が過ぎたので、パウロは自分が囚人として乗っている船の船員たちに何を勧告しましたか（使徒行伝 27:4–10）。そのかわりに百卒長は何をすることを選びましたか。そして、なぜ彼らはパウロの勧告に聞き従うべきだったのですか（使徒行伝 27:11–20）。

c. 彼らのなした誤った決断にもかかわらず、神は船員たちに憐れみ深く、パウロを通してどのように慰めをもたらされましたか（使徒行伝 27:21–26）。

d. 船員たちは、嵐と激しく戦っていた 14 日間の断食の後でさえ、自分たちがどのような困難な状況にいることを見出しましたか（使徒行伝 27:27–29）。

「パウロには自分自身のための恐れはなかった。彼は自分が飢えた水にのみ込まれることがないことを確信していた。神は彼がローマで真理のための証言ができるように彼の命を守られるのであった。しかし、彼の人間的な心は、自分の周りにいるかわいそうな魂たちをあわれんで同情した。」（同上 266）

3. 救う感化

a. 水夫たちにはどのような利己的な意図がありましたか。またパウロはどのようにわかるように彼らの計画の悪に挑みましたか（使徒行伝 27:30, 31）。

「ついに雨と嵐を経て、灰色の光が彼らのやつれた青ざめた顔を照らした。嵐の岸辺の輪郭線がおぼろげに見えたが、なじみのある陸標は一つも見当たらなかった。利己的な異教の水夫たちは、船と乗組員を捨てて、大変な思いをして船につり上げた小舟で自らを救おうと決心した。船の安全を確保するために何かもっとできるふりをして、彼らは小舟を解いて、それを海へおろし始めた。彼らが成功していれば、彼らは岩に打ちつけられて粉みじんになり、一方船上の人はみな、沈む船体を取り扱うことができずに滅びたことであろう。

そのとき、パウロはこの低俗な計画に気づいて、危険を回避した。彼のいつもの迅速な精力と勇気をもって、彼は百卒長と兵卒たちに、『あの人たちが、舟に残っていなければ、あなたがたは助からない』と言った（使徒行伝 27:31）。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 267, 268）

b. どのような断念の行為がすぐに続きましたか（使徒行伝 27:32）。

「神を信じる使徒の信仰は揺るがなかった。彼は自分自身の命が守られることに関しては疑いがなかった。しかし、乗組員たちの安全の約束は、彼らが義務を果たすという条件付きであった。兵卒たちは、パウロの言葉を聞いて、ただちに小舟の綱を切り、それが海の中に落ちていくままにした。」（同上 268）

c. 使徒はどのように苦しんでいる人々にさらなる慰めをもたらしましたか（使徒行伝 27:33–38）。

「疲れてびしょぬれになり、意気消沈した 276 人の魂の群衆は、パウロがいなければ絶望して自暴自棄になっていたはずであったが、今や新たな勇気を得て、使徒と共に 14 日ぶりの食事をした。その後、自分たちの船荷を守ることはできないことを知って、彼らは船に積んでいた穀物を船外へ投げ捨てることによって船を立てなおした。」（同上 269）

4. マルタに座礁した

a. ついに囚人でいっぱいの船はどうなりましたか。それはなぜですか（使徒行伝 27:39–44）。

「もし囚人のだれかがいなくなれば彼らに対して責任をもっていた人々の命が失われるのであった。そこで兵卒たちはすべての囚人たちを死に処したいと願った。ローマの法律はこの残酷な方針を認めており、もし兵卒にとっても囚人にとっても一様に命の恩人であった人がいなければ、ただちにこの申し出は実行されていたはずであった。百卒長ユリアスは、パウロが船上のすべての人の命を救う器であったことがわかっていたので、彼を殺すことを許すのは最低の忘恩だと感じた。さらに、彼は主がパウロと共にいることを確信していたので、彼に害を加えることを恐れた。そこで彼は囚人たちの命を救うことを命じ、泳ぐことができる者は海に飛び込み、陸へつくように指示した。残りの人々は板や船の破片につかまって、波によって陸まで運ばれていった。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 269, 270）

b. 破船した乗客は島で何を見つけましたか（使徒行伝 28:1, 2）。

c. 土着の未開人たちの面前で、パウロに何が起こりましたか。またこれらの人々は直ちに使徒について何と思いこみましたか（使徒行伝 28:3, 4）。彼らはまもなく、主がご自分の僕のために働かれた奇跡にどのように反応しましたか（使徒行伝 28:5, 6）。

「パウロは燃料を集めるのに最も活動的な者の一人であった。彼が枝の束を火にくべるときに、熱さによって突然まむしが休眠から覚めて、束から飛び出し、彼の手にしっかりかみついた。そばに立っていた人々は恐怖に打たれて、彼の鎖を見て囚人だと思い、互いに『この人は、きっと人殺しに違いない。海からはのがれたが、ディケーの神様が彼を生かしてはおかないのだ』と言った（使徒行伝 28:4）。しかし、パウロはその生き物を火の中に振り落として、なんの害も被らなかった。その有毒な性質を知っていて、たちまち倒れて死ぬか、恐ろしい苦悩にもだえるだろうと、彼らはしばらく彼の様子をじっとうかがっていた。しかし、何の不快な結果も続かないので、彼らは考えを変えて、ルステラの人々のように、彼は神だと言った。このできごとによって、パウロは島の人々に強い感化力を得た。そして、彼は彼らが福音の真理を受け入れるように導くことにおいてそれを忠実に活用しようと努めた。」（同上 270, 271）

木曜日　*9月12日*

5.　ローマへ向かって前進する

a.　パウロはどれくらいの間、囚人仲間とマルタ島に残っていましたか。そして彼らは、なぜその島におけるやむを得ない滞在に成功が見られたのですか（使徒行伝 28:8–11）。

「三か月のあいだ船の同乗者たちはマルタ島に滞在したが、パウロと彼の共労者たちはその間、幾度も機会を捕らえて福音を説いた。主はすばらしい方法で彼らに働きかけられた。パウロのために、難破船の同乗者たち全員が手厚くもてなされ、彼らの必要なものはみな支給されて、マルタを出発するときには、航海に必要なものがことごとく惜しみなく用意されたのである。」（患難から栄光へ下巻 137）

b.　どこで、使徒はついにもう一度自分の兄弟たちとの交わりを見出すことができましたか（使徒行伝 28:12–14）。

「航海の開始とともに、百卒長と囚人たちはローマに向かって出帆した。西方へ向かう途中、マルタ島に冬ごもりをしていたデオスクリの船飾りのあるアレキサンドリヤの船にこの旅行者たちは乗り込んだ。逆風のために少々遅れたが、無事に航海を終えて、船はイタリヤ沿岸のポテオリという美しい港に停泊した。

ここに数人のクリスチャンがいた。彼らはパウロに七日間滞在するように頼んだ。この願いは親切な百卒長に許された。イタリヤのクリスチャンたちは、ローマ人へ宛てたパウロの手紙を受けていたので、使徒の訪問をしきりに待っていたのである。彼らはパウロが囚人として来るとは思っていなかった。しかし彼はその苦難のゆえに、一層深く彼らから慕われた。」（同上 138, 139）

金曜日　*9月13日*

個人的な復習問題

1.　わたしたちはまもなく訪れる危機のためにどのように準備すべきですか。
2.　何がパウロが周囲の人に及ぼした感化力を表していますか。
3.　危険な破船の間、パウロの主要な懸念事項は何でしたか。
4.　マルタ島でのパウロの経験を述べなさい。
5.　イタリヤのクリスチャンがパウロを歓迎した方法から、わたしたちはどのように鼓舞されますか。

ローマ

「わたしとしての切なる願いは、ローマにいるあなたがたにも、福音を宣べ伝えることなのである。わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。」（ローマ 1:15, 16）

「パウロはローマへの訪問を長い間待ち望んでいた。彼はそこでキリストのために証をすることを大いに願っていたのに、自分の目的がユダヤ人の敵意によって妨げられたと感じてきた。彼は自分が〔囚人として〕ローマへ行くことになろうとは、……夢想だにしなかった。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 225）

推奨文献： 患難から栄光へ下巻 138-160, 177-179

日曜日　*9 月 15 日*

1.　長い間願っていた目的

a.　パウロはどれくらい長い間、ローマにいる信徒たちに会いたいと願っていましたか（使徒行伝 19:21）。使徒の心のうちにあるこの目的をだれが確認しましたか（使徒行伝 23:11）。

b.　ローマ人へ宛てたパウロの手紙の影響力を述べなさい（ローマ 1:1–7）。

「ローマのクリスチャンに語りながら、パウロは他の諸教会も教えようと計画していた。しかし、彼は自分の言葉の遠大な影響力をなんとわずかしか見通すことができなかったことであろう。この手紙の中ではっきり提示されている信仰による義認の偉大な真理は、各時代を通じて、悔い改める罪人を命の道へ導く強力な灯台として立っている。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 187）

c.　パウロはなぜローマへ行きたかったのですか（ローマ 1:8–17）。ローマ人への手紙の中で、使徒はどのような励ましとなる勧めをしましたか（ローマ 16:19, 20）。

2. 心温まる歓迎

a. パウロのローマの町への到着を述べなさい（ローマ 28:15）。

「パウロは重い心で、長い間期待していた世界の首都への訪問に出発したのである。彼が予期していたこととは何と事情が違っていることであろう。鎖につながれ、汚名を着せられている身で福音をのべ伝えるとは何ということであろうか。ローマで多くの魂を真理へ導きたいという彼の希望は、当てはずれに終わる運命にあるように思えた。

ついに旅行者たちは、ローマから 40 マイルのところにあるアピオ・ポロに着く。彼らが大通りにむらがる群衆をわけて進んで行くと、かたくなな顔つきをした犯罪人と一緒に鎖につながれた白髪の老人は、多くの人々の侮蔑的な流し目を受け、多くの無礼な嘲笑のまととなる。

突然歓喜の叫びがきこえたかと思うと、ひとりの男が通りがかりの群衆の中からとび出してきて、その囚人の首にしがみつき、あたかも息子が長い間留守をしていた父を迎えるかのように、涙とよろこびをもって抱きしめる。多くの者が愛情のこもった、しかも待ちかねたようなまなざしで、この囚人こそ、かつてコリントで、ピリピで、エペソで自分たちにいのちのことばを語ってくれた人だと認めるや、そのつど同じ光景が繰り返される。

心の暖かい弟子たちが福音の父のまわりに熱心にむらがるたびに、一行は全部立ち止まってしまう。兵士たちは遅れるのでいらいらするが、この楽しい面会を邪魔しようとは思わない。彼らもこの囚人を尊敬し重んじるようになっていたからである。弟子たちは、そのやつれた、苦労の刻まれている顔に、キリストのみかたちが反映されているのを見る。彼らは、パウロを忘れたこともなければ、彼を愛する心にも変わりがないということ、また、彼らの生活を生き生きしたものにし、神に対する平和を与えてくれるよろこばしい望みが持てるのは、彼のおかげであるということを、自信をもってパウロに伝える。彼らは、特別に許されさえすれば、町までの道をずっと、愛の熱情に燃えて、パウロを肩にのせて行くであろう。

パウロが兄弟たちに会って『神に感謝し勇み立った』と述べているルカの意味深長な言葉に気がつく者はほとんどいない（使徒行伝 28:15）。パウロの鎖を恥とせず、かえって同情して泣く信者の群れの真中にあって、使徒は声高らかに神を讃美した。彼の心にたれこめていた悲しみの雲は一掃された。キリスト者としての彼の生涯は試練と苦難と失望との連続であったが、このとき彼は豊かに報いられたと思った。彼は一層しっかりと足を踏みしめ、よろこびに心をはずませて、彼の道を歩みつづけた。彼は過去について不平を言わず、未来を恐れもしなかった。投獄と患難が待ち受けていることを知っていたが、彼はまた、もっと恐ろしい無限のなわめから魂を救うことが彼の仕事だということを知っていて、キリストのために受ける苦しみをよろこんだのである。」（患難から栄光へ下巻 139 ～ 141）

3. 自分の同郷の人々に訴える

a. パウロはどのようにローマでいくぶん苦難から解放されましたか（使徒行伝 28:16）。

「ローマで百卒長ユリアスは、囚人たちを皇帝の侍衛の長に引き渡した。ユリアスがパウロについてよい報告をしたのと、フェストの手紙のおかげで、パウロは隊長から好意を示され、獄に放り込まれず、自分の借家に住むことを許された。やはり番兵をつけられてはいたが、パウロは自由に友人たちに会い、キリストのみわざの進展のために骨折ることができた。」（患難から栄光へ下巻 141, 142）

b. ローマにおいて三日後、パウロはユダヤ人の長老たちに会うために特別な要請をしました。わたしたちはパウロの態度から何を学ぶことができますか（使徒行伝 28:17–20）。

「パウロは自分がユダヤ人から受けた辱めや、彼らが繰り返し彼を殺そうとしたことなどは、何も言わなかった。彼は用心深く、思いやりのある言葉で語った。人をひきつけたり、同情を求めたりしているのではなく、真理を弁護し、福音の栄えを保とうとしていたのである。」（同上 142, 143）

c. 達成された結果を述べなさい（使徒行伝 28:21–24）。使徒はついにどのように結論を出しましたか（使徒行伝 28:25–27）。

「彼〔パウロ〕は自分の経験を話し、簡潔に、誠実に、力強く、旧約聖書から論証を与えた。

使徒は、宗教が、慣習や儀式、信条や理論のうちにあるのではないことを教えた。……パウロは、宗教とは実際的な救いの力であり、完全に神から来る原則であり、魂に働きかける神の再生力を個人的に経験することであると教えた。……

信仰によってキリストを理解すること、キリストについて霊的な知識を持つことは、主が地上におられたときに主と個人的な面識があったこと以上に望ましいことなのである。今、パウロに許されていたキリストとの交わりは、単なる地上の人間同士の交わり以上に親しいものであり、長続きするものであった。

ナザレのイエスがイスラエルの望みであることについて、パウロが知っていることを語り、見たことをあかししたとき、ほんとうに真理を求めていた人たちは納得した。彼の言葉は少なくともある人々の心に、決してぬぐい去られることのない印象を与えた。しかし他の者たちは、……聖書の明白なあかしを示されても、それを受け入れることを頑固に拒んだ。」（同上 143 ～ 145）

4. 異邦人に及ぶ救い

a. パウロのどの宣言が、今日も依然として明白ですか（使徒行伝 28:28）。パウロの言葉の結果は何でしたか（使徒行伝 28:29）。

b. まだローマの護衛につながれていたとはいえ、パウロに与えられた新しい生活状況を述べなさい（使徒行伝 28:30, 31）。神はこの困難をどのように良い目的のためにお用いになりましたか（ピリピ 1:12–14）。

「一見活動的な働きが絶たれたように見えたが、パウロは、以前のように諸教会を自由に訪問して歩いた年月よりもっと広い、永続性のある感化を及ぼした。主の囚人として、彼は兄弟たちに一層強い愛情をいだいた。キリストのための捕われの身で書いた言葉は、彼が直接彼らと共にいたとき語った言葉より、もっと熱心な注目と尊敬を集めた。信者たちは、パウロが彼らから引き離される時まで、彼が彼らのために負い続けた責任の重さに気づかなかった。これまで彼らは、パウロのような知恵や機転や不屈の精力に欠けているので責任や重荷を負えないと言いのがれをしてきた。しかし彼らは、今、これまでパウロの個人的な働きを重んじないで、教訓を避け、それを学ぶ経験を持たずにいたので、パウロの警告や勧告や忠告をありがたいと思った。そして、パウロの長い投獄中の勇気と信仰について学び、彼らはますますキリストのみわざに対する忠誠心と熱意をかき立てられた。」（同上 146）

c. パウロは奴隷をもつことをゆるす政策をもつ既存のローマの秩序をくつがえそうとはしませんでしたが、それでもどの原則を教えましたか（ガラテヤ 3:8; エペソ 6:9; コリント第二 3:17）。彼がどのように希望のない者のうちに希望を見たか例を挙げなさい（ピレモン 10–18）。

「パウロはあわれな逃亡者が困って苦しんでいるのを親切に助けてやり、それから彼の暗い心に真理の光を照らそうと努めた。オネシモはいのちの言葉に耳を傾け、罪を告白して、キリストを信じる信仰へと改心した。」（同上 148）

木曜日　*9月19日*

5.　多神教の本拠地のただ中で

a.　邪悪な皇帝ネロに支配された下劣で堕落した都市におけるパウロの滞在において、最も顕著な改心者の中にだれがいましたか（ピリピ 4:22）。このことは、わたしたちが不利な状況にあって言い訳するよう誘惑されるときにいつでも、何を教えますか（ピリピ 4:11–13）。

「自分たちの環境はキリストのためにあかしするにふさわしくないと、言いわけしたくなる人がいるならば、カイザルの宮廷で、皇帝の堕落や王室の不品行を見ている弟子たちの立場を考えてみるがよい。宗教的な生活にとってこれほど好ましくない環境を、また、これらの人々の置かれている立場ほど大きな犠牲と反対を伴う環境を、ほかに想像することはできないであろう。さまざまな困難と危険のただ中にあってもなお、彼らは忠誠を保ちつづけていた。……

救い主はご自身の模範によって、弟子たちが世にありながら世のものにならないでいられることを、お示しになった。主は世の欺瞞的な快楽を味わったり、世の風習に支配されたり、世の習慣に従ったりするために来られたのではなく、父のみこころを行うために、また失われた者を探して救うためにおいでになった。この目的を目の前におくとき、クリスチャンはどんな環境にも汚されないでいることができる。身分が高かろうと低かろうと、環境がどうであろうと、彼は義務を忠実に果たすことに、真の宗教の力をあらわすのである。

試みから逃れるのではなく、試みのただ中にいてクリスチャンの品性は磨かれる。拒絶や反対にさらされると、キリストの弟子はますます用心するようになり、一層熱心に偉大な助け主に祈るようになる。神の恵みによりきびしい試みに耐えると、忍耐強く、用心深く、不屈になり、また、神を信じる信仰が深まり、長続きするようになる。クリスチャン信仰の勝利とは、キリストに従う者が、苦しみを受けるが強められ、服従するが勝利し、たえず死に渡されるが生かされ、十字架を負うが、栄光の冠を受ける、まさに、このことである。」（患難から栄光へ下巻 158 ～ 160）

金曜日　*9月20日*

個人的な復習問題

1. **わたしたちはどのようにローマへ行きたいという切実なパウロの願いによって鼓舞されますか。**
2. **パウロの到着の光景は人生における優先事項について、何を教えますか。**
3. **わたしたちはどのように、ユダヤ人同様にキリストの教えを見逃す危険があるかもしれませんか。**
4. **ローマでのパウロの生活環境を提供された神のご目的を説明しなさい。**
5. **なぜわたしたちはカイザルの家の中での改心者によって、へりくだりを感じるべきなのですか。**

信心深い生涯の終幕

「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。」(テモテ第二 4:7, 8)

「〔パウロ〕自身の生涯が、彼の教えた真理の生きた実例であった。そして人々に対する彼の力はここにあった。」(ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 325, 326)

推奨文献： 患難から栄光へ下巻 180-199, 206–211

日曜日　*9 月 22 日*

1.　トロアスでの逮捕

a.　まったく勝算がないにもかかわらず、パウロは、カイザルの継承者でおそらく最も下劣で、最も残忍な暴君ネロの宣言により、どのように奇跡的に自由にされましたか。使徒はこの新たに得た自由をどのように考えましたか (ガラテヤ 5:13)。

b.　ローマのクリスチャンに対する迫害からは救われましたが、パウロがトロアスに戻る間に何が起こりましたか (テモテ第二 4:14, 15)。

「ユダヤ人たちはパウロをローマの放火を先導したという罪でとらえておこうとの考えをいだいていた。だれ一人として一瞬たりとも彼が有罪だとは信じていなかった。しかし、彼らは最も弱々しい口先だけの表現でなされたそのような告発が彼の運命を封印することを知っていた。まもなく彼らの計画を執行するための機会が提供された。トロアスの町にある弟子の家で、パウロは再び捕らえられた。そしてこの場所から彼はその最後の投獄へとせかされた。

逮捕は、銅細工人のアレキサンデルの努力によって達成された。彼はエペソで使徒の働きに反対することに成功しなかったので、今や自分が打ち負かすことのできなかった者への復讐の機会をとらえたのであった。」(ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 304, 305)

c.　彼の状況を考えて、使徒は愛する信仰の息子であるテモテに宛てた手紙の中で、どのような心を打つ訴えをしましたか (テモテ第二 1:7–14; 4:9)。

2. キリストのような信仰

a. なぜローマにおけるパウロの二回目の罪状認否は、特に厳しいものだったのですか。また助けることができたはずの人々に対する彼の態度はどのようなものでしたか（テモテ第二 4:16）。

「都市と国家に対する、最も卑劣で最も恐るべき罪悪を扇動したという告発を受けて、パウロは天下ののろいのまとであった。

使徒パウロの重荷を分かち合っていた少数の友人たちは、今、ある者は彼を見捨てて、また他の者は諸教会への任務を帯びて、彼のもとを去りはじめた。」（患難から栄光へ下巻 185）

b. これらすべてにおいて、パウロはどのような確証をもっていましたか（テモテ第二 4:17, 18）。彼はまたどのような人間的な慰めを受けていましたか。

「使徒パウロは、老齢と辛苦と病気とのために弱り、ローマのしめった暗い地下牢に閉じこめられていたこの時ほど、兄弟たちの奉仕を必要としたときはなかった。……

パウロは困難や苦しみなどは気にかけないように見えたが、同情や交わりをせつに求めていた。オネシポロの訪問は、パウロが孤独で見捨てられていた時にも彼がパウロに誠実だったことをあかしするものであり、他の人々のために奉仕の生涯をささげてきた使徒を、よろこばせ、励ましたのである。」（同上 185, 186）

c. 使徒がすべてのことを経た後、なぜ彼はテモテに会いたかったのですか。またなぜ彼の心は、今や信仰において十分成長したマルコに対して和らいだのですか（テモテ第二 1:3–6; 4:9–11）。

「マルコのクリスチャン経験は、信仰を告白した当初のころから次第に深まってきていた。彼はキリストの一生と死について綿密に研究するにつれて、救い主の使命、その辛労と戦いをはっきり把握できるようになった。キリストの手足の傷あとの中に、人類のためにささげて下さった奉仕のしるしと、失われて滅びゆく者を救うために示された自己放棄の深さを認めて、マルコは喜んで主にならって自己犠牲の道を歩むようになっていた。今彼は捕らわれの身となったパウロと運命を共にすることによって、キリストを得ることは無限に益となることであり、世を得て、あがないのためにキリストが血を流された魂を失うことは無限に損となることを、一層よく悟ることができた。彼は激しい試練や逆境に会ってもぐらつかず、最後までパウロの愛する賢い助け手となった。」（同上 147）

3. たいまつを次に渡す

a. パウロがかたくなになったネロに福音を説き、多くの人の心に触れたとき、信仰のむすこのために彼は何を願いましたか（テモテ第二 2:1–4; 4:1, 2）。使徒はこの若い牧師に、何について警告し、訓告するよう迫られるのを感じましたか（テモテ第二 3:1–5, 13, 14; 4:3–5）。

b. パウロは福音を宣布しているときに得た多くの経験において、神の愛情深い保護について、何ということができましたか（テモテ第二 3:10, 11）。わたしたちはみな、パウロの生涯を考えて、何を悟らなければなりませんか（テモテ第二 3:12; コリント第二 11:23–28）。

「真理はいつも十字架を伴う。信じない者は、信じる者に反対し、嘲る。真理を提示するときに反対のあらしを生じるという事実は、真理に不利な証拠とはならない。預言者や使徒たちは良心的に神に従おうとしたために自分たちの命を危険にさらしたのである。そしてわたしたちの救い主は、『いったい、キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける』と宣言しておられる（テモテ第二 3:12）。これがクリスチャンの遺産である。」（パウロの生涯からのスケッチ 279）

「改革の行動はいつも損失、犠牲、危険を伴う。それはいつも安逸への愛着、利己的な関心、欲深い野心を譴責する。そのために、だれでもそのような行動を始め、実行する人は、改革の条件に服したくない人々からの反対や中傷や憎しみに直面しなければならないのである。罪深い習慣やならわしを克服するのは簡単なことではない。働きはただ神聖な恵みの助けをもって成し遂げることができる。しかし、多くの者はそのような助けを求めることを怠り、自分自身を神の標準に合わせるために引き上げる代わりに、自分たちの不足に合わせるために標準を下げようと努力する。」（同上 305, 306）

c. パウロは自分の生涯を鎖につながれて閉じることを、どのように感じましたか（テモテ第二 2:7–10）。あらゆる迫害にもかかわらず、わたしたちのすべての決定と実行の源泉は何でなければなりませんか。またどの保証がなくてはなりませんか（テモテ第二 3:16, 17; ヨハネ 8:32–36）。

「真理のために信徒が牢獄の壁に監禁されるとき、キリストは彼にご自身を表して下さり、彼の心をご自分の愛で魅了して下さる。彼がキリストのために死を遂げるとき、キリストは彼に『彼らは体を殺すかもしれないが、魂を傷つけることはできない』『勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている』（ヨハネ 16:33）と言われる。」（セレクテッド・メッセージ 3 巻 420, 421）

4. 死に先立つパウロの証

a. パウロの生涯の終りに、彼は何を悟りましたか。また彼は何を十分に証することができましたか（テモテ第二 4:6–8）。彼はどのように死にましたか。

「パウロに対する皇帝の悪意は、皇室の人々や他の優秀な人物が、彼の第一次の投獄の間にキリスト教に改心したという事実により増し加わった。この理由のために、〔ネロ〕は、一回目の投獄よりも二回目ははるかに厳しくし、彼に福音を説く機会をほとんど与えなかった。そして、彼はもっともらしい口実が見つかり次第、彼の命を短くしようと決意していた。ネロの思いは、パウロの最後の審判における彼の言葉の力に印象づけられたため、無罪を宣告することも有罪を宣告することもせず、判決を延ばしていた。しかし、宣告は延ばされていただけであった。パウロを殉教者の墓へ引き渡す決定が宣告されるのにさほど時間はかからなかった。ローマの市民であったため、彼を拷問にかけるわけにはいかなかった。したがって、断頭の判決が下った。」（ﾊﾟｳﾛの生涯からのｽｹｯﾁ 328）

「パウロは執行の場所へ秘かに連れて行かれた。彼の迫害者たちは彼の影響力の範囲を警戒し、彼の死の光景によってさえ、改心者たちがキリスト教へ勝ち取られることを恐れた。そのため、ほとんど傍観人が同席することは許されなかった。しかし、彼に随行するよう任命された無情な兵士たちは、彼の言葉を聞き、またそのような死を目前にしながら、快活で喜んでさえいるパウロを驚きをもって見た。自分の殺人者たちに対する彼の許しの精神、そして最後まで揺るがないキリストへの信頼は、彼の殉教を目撃した人々にとって命から命へ至る香りであることが立証された。まもなくパウロが宣べ伝えた救い主を受け入れ、恐れることなく自分の信仰をその血をもって封印する者は一人ではなかった。」（同上 329, 330）

b. わたしたちが福音の栄光に満ちたメッセージを深く熟考するとき、使徒はわたしたちがどのような保証をいだくことを熱望していますか（ローマ 8:31–34）。

「パウロは地上における彼の生涯を通じて天の雰囲気をたずさえていた。彼と交わる人はみな、彼がキリストと結合し、天使たちと交わっている感化力を感じた。ここに真理の力があった。自然に備わった無意識の聖なる生活の感化力こそ、キリスト教のためになすことのできる最も説得力のある説教である。議論は、どれほど反駁できないものであっても、ただ反対しか引き起こさないかもしれない。しかし、信心深い模範には完全には抵抗できない力がある。」（同上 331）

木曜日　9月26日

5.　わたしたちの益のためにこの教訓を適用する

a.　わたしたちはこの柔和な信仰の人の生涯―もしわたしたちが望むならば、多くの方法においてわたしたち自身の中にこだますることのできる生涯―を、祈りをもって熟考することにより、なぜ愛と行動へ活力を吹き込んでもらうことができるのですか（ローマ 8:35–39）。

「各時代において、非難と誘惑と苦難のただ中で、クリスチャンを支えてきたものは何であろうか。受ける者を聖化する真理が何かを理解しようと絶えず働かせる純潔で信頼する信仰、いついかなる状況下でも、魂の守りを自分の知っているお方として神におゆだねすること、その信頼が裏切られることはない。」（上を仰いで 244）

「パウロはその長い奉仕の期間を通じて、けっして自分の救い主への忠誠がゆらぐことはなかった。彼がどこにいても―しかめつらのパリサイ人の前でもローマ当局の前でも、ルステラの憤激した群衆の前でも、あるいはマケドニヤの地下牢にいる有罪宣告を受けた罪人たちの前でも、破船した船上でパニック状態になった水夫たちを説得しているときも、自分の命のためにネロの前で申し立てをするために一人で立っているときも―彼は決して自分が擁護しているみ事業を恥とすることはなかった。彼のクリスチャン生涯の一つの大目的は、かつては自分が侮辱していたみ名を持つお方に仕えることであった。そしてこの目的からは反対も迫害も彼をそらせることはできなかった。……

彼の自己との闘いにおいて彼を支えた根底となる動機は、救い主への愛であった。キリストの奉仕において悪に対する彼の苦闘の中で、彼は世の冷淡さと敵の反対に対して押し進んだ。

この危険な時代に教会が必要としているものは、パウロのように、自らを有用性のために教育し、神の事柄において深い経験をもち、真剣さと熱心さに満たされた働き人の軍勢である。」（闘争と勇気 356）

金曜日　9月27日

個人的な復習問題

1.　わたしたちはパウロに対するはなはだしく不正な告発から何を学ぶべきですか。
2.　パウロとマルコの両者の態度における成長を説明しなさい。
3.　改革はなぜいつも難題でありながら、報いのあるものなのですか。
4.　殉教におけるパウロの態度を述べなさい。
5.　わたしたちがパウロの生涯を研究することによって得られる洞察を要約しなさい。

第一安息日献金

4月6日

インド・プネの教会のためにのために

(4 ページ参照)

5月4日

2013 年ロンドンプロジェクトのために

(25 ページ参照)

6月1日

ベリーズにおける本部のために

(46 ページ参照)